
かくれんぼお月様と歌を知らない歌姫

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくれんぼお月様と歌を知らない歌姫

【Nコード】

N6026T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

ある日、ヲタクのヲサクの前に
突然、パソコンから初音ミクが現れた……

プロローグ

むかし、むかしある所に歌う為に生まれた女の子がいました。

でも、女の子はいくら歌を歌いたくつても歌う事ができません。

自分ひとりでは歌う事ができないからです。

だから女の子は探しに行くことにしました。

自分に歌を教えてくれる人を自分の声を必要としてくれる人を自分と一緒に歌ってくれる人を……

そして、自分の全てを受け止めてくれる人を。

遙か彼方からこの世界に流れ込んでくる。

優しい旋律心地よい律動愛しいような切ないような、透き通る声が

……

「止めないで、もっと、もっと聴かせて……」

無邪気な子どもが欲しい物をねだる様に、思わず両手を差し出した瞬間に閃光が走り世界が一変した。

光

都内の某所、小綺麗なワンルームマンションの五階の部屋でパソコンに向かい作業をしている。

小遣い稼ぎの簡単な打ち込みの仕事なのだが、結構手間が掛かった。ボーカロイド2と言うソフトを使い歌詞と旋律を打ち込んでいく、そして微調整を繰り返しながら曲に合わせて微妙に声質を変える。

「はあ、これで、良いかな？ とりあえず」

一応、出来上がった物をネットで依頼主に送り確認をもらう。そして駄目なら……

「って、速攻駄目だしだよ！ つうかムズ！」

誰も居ない部屋で1人突っ込みをしているとお隣さんからメールが届いた。

『明日も早いんだから、いい加減に寝ろ！』

『了承、これが終われば』

『アホ！ フタク』

返信するところでも速攻で返事が帰ってきた。

鬱陶しいので携帯の電源を切れば言いのだが、そんな事をすれば直ちに部屋に踏み込まれる事が判りきっている。

マナーモードに……面倒なので放置を決め込む。

パソコンにヘッドフォンを繋ぎ、一切の雑音をシャットアウトして作業に没頭する事にする。

ヘッドフォンからは組み立てている曲と歌が流れてきた、それをフリーズごとに別けて確認をしていき不自然な所の調整を繰り返す。

こんな姿を他人に見せたら99.9%の人間がドン引きするだろう。身長が180オーバーで標準体型より少しだけスリムな男が猫背姿でパソコンに向っている。

寝癖がついたら治りそうに無いくらいの髪の毛は伸び放題で、前髪で顔は隠れその上に眼鏡を掛けているので表情は全く読めない。

上下とも鴉の様に黒のスエット姿でヘッドフォンをしながらパソコンのモニターの明かりだけが眼鏡に映りこんでいる。そしてひとり言をブツブツと……

残りの0.01%は確実に俺と同類のヲタクだろう事が確実に言える。

「はあゝ これ以上は無理！」

一通り確認し調整を終えて再生ボタンをクリックすると前奏が始まる。

無意識の内にメロディーを口ずさんでいた。

そして歌がはじまり歌を口ずさみそうになり思わずヘッドフォンを外して、依頼主に送信し返信が返って来る間も置かずにパソコンをシャットダウンしてベッドに体を投げ出した。

窓の外からは都内だけあり車のクラクションや夜中に走る貨物か何かの列車の音が遠くから聞こえてくる。

そんな音が心地良く思え、眠りの世界に引き込まれていく。

どの位の時間が過ぎたのだろう落とした筈のパソコンが立ち上がる音が聞こえてくる。

そして、何処からか音楽が聞こえてきたテクノぽい前奏だが聞き覚えがる、一度聞いたなら忘れられないくらいインパクトがある曲だった。

「ねぎはついてないけど……きみのこと、みくみくにしてあげる……」

睡魔に引きずり込まれそうになる意識を何とか繋ぎとめてパソコンを見ると青いパイロットランプが点滅していて曲はヘッドフォンから流れていた。

「ふえい、おかしいや。 何故、初音ミク？」

寝ぼけ眼のまま体を起こして呂律の回らない口でひとり言を呟く。そしてモニターに目をやった瞬間にモニターが爆発したんじゃないかと思うくらいの閃光が走り。

……光りの中から何かが現れ始めた。

モニターの光りの中から二本の手が出てくる。

その手は見るからに厳つい男の手ではなく健康的と言えば言いのだろうか、どう見ても女の子の手にしか見えなかった。

そして頭が……

有り得ない色の髪の毛だったスカイブルー？

いやエメラルドグリーンと言えば言いのだろうか。

体が現れ足だけがまだモニターの光りの中だった。

華奢な体つきで小遣い稼ぎの打ち込みをしている時にモニターの中で踊っていた近未来的な衣装を身に着けている。

子どもが何かを求めるように両手を広げ俺に向かい微笑んだような気がした。

夢なのか？

夢じゃなきゃ俺の頭が本格的におかしくなったんだ。

そんなはずは無い自分でも普通では無いと思うがそこまでおかしい訳じゃない。

今時の21歳にしたらこれでも一般常識を弁えているほうだと、思う。幽霊？

非科学的だが信じていない訳じゃないがあまりにもリアルだった。

そして俺も一応、たとえ幽霊の女の子でも両手を広げられて何かを求められたら悪い気はしない健全な青少年なんだ。

無意識に彼女に向かい『おいで』と両手を差し出すと彼女が胸に飛び込んできた。

そして、彼女の顔を見た瞬間に背筋に冷たい物が一瞬だけ走った。

彼女の瞳には光りが無かった、漫画やアニメで良くある光りを失った人形のような瞳だった。

すると、僅かに彼女の口が動いた。

「ウタ ヲ オシエテ アナタ ノ コエ ヲ キカセテ ケイヤク ノ アカシ」

まるで機械が喋るような片言の日本語だった。

彼女の手が俺の顔に伸びてきて俺の唇に彼女の指が触れる。

その指は人形の指とは違い血が通っているような温かさを感じる。
まるで夢のようになって夢なんじゃないか？

夢なら別に構わないか……

明け方に寝ぼけて回らない頭がたたき出した答えがそれだった。

俺は、心の奥底に仕舞いこんだ歌を口ずさんだ。

「ヤット アエタ アリガトウ」

片言の日本語でそう言うとな彼女の瞳に光りが灯った。

その瞳は吸い込まれそうに澄んでいて思わず見蕩れてしまう。

その時に再び機械的な声が聞こえた。

「カリケイヤク ガ カンリヨウ シマシタ。 3…… イナイ ニ

ホンケイヤク……」

機械的な声が遠ざかり意識も遠ざかる。

ミク

遠い遙か彼方の世界で電子音が俺を呼んでいる。

現実の世界に引き戻されて……

柔らかい物が腕に中にあるのを感じる。

こんなヲタク丸出しの抱き枕なんていつ買っただろう、それにしてもあまりにもリアルで本物の女の子を……

意識が一気に覚醒する。

俺の腕の中には夢の中でパソコンのモニターから飛び出してきた、

あの女の子が可愛らしい寝息を立てていた。

「うわぁ！ な、なんなんだ？」

慌ててベッドから飛び起き後ずさりすると体を支えようとついた手が空を切っていた。

何とかバランスをとろうとするが引力には勝てず、体が床に目掛けて傾きはじめる寝起きで体に切れが無くそのまま床に落ちて後頭部をパソコンの椅子に強打すると大きな音がした。

「痛っ！ 勘弁してくれ」

見上げると女の子が目覚ましベッドの上でちょこんと座り俺を見つめて微笑んでいた。

次の瞬間に恐ろしいイメージが頭の中を駆け抜けた。

全身の血の気が引き、顔が青ざめるのが自分でも判った。

血の気が引くのと同時に頭の中でこの状況をどうするかフル回転させ考えるが答えは1つしか出てこなかった。

隠すでもなくありのままの状況で切り抜けるしかない、

無闇に隠したりして発覚した時には天に召すか地獄に堕ちるかの二者択一なのだから。

彼女をベッドの奥に足を投げ出した人形のように座らせて『頼むから、動かないでくれ』と念を押すと彼女が小さく頷いた。

確信はないが言葉は通じるようだ。

それと同時に玄関のチャイムが鳴りガチャガチャと鍵を開ける音がある。

何かが残像の残るくらいの速さで飛び込んでくる。

ショートカットで身長162センチの体重が……

「言っな！」

「ぎゃん！」

槍の名手も真つ青なくらいの光速の地獄突きが俺の喉元に炸裂した。朝一番に過激極まりない行動を取るのは二卵性双生児の妹の月島^{つきしまの}望^{ぞみ}で。

喉元を押えながら蹴りつけられた犬のような声を上げたのが一応兄貴と言う事になっている、俺、月島^{つきしま}朔だ。

双子なのでどちらが兄で妹でも姉と弟でもかまないのだが世間一般には俺が兄という事になっている。

「何を朝から大きな物音をだしてるの？ 朔は」

「いや、望の声のほうで遥かにデカイと思うが？」

「変ね、女の子の気配がする、朔じゃ有り得ない事だけど」

いや、部屋に飛び込んでくるなりそんな気配まで感知する望の方が俺にとっては有り得ないことだった。

そんな事は鼻から判りきっていた、だからこそお人形のように……

「さ、朔？ このベッドの上にある有り得ない色をした髪の毛の長いお人形のようなものは何かしら？」

「どこからどう見ても初音ミクのフィギュアだろ」

「私には百歩譲ってもフィギュアの大きさには見えないんだけど？」

「等身大サイズだから、一分の一だもん」

俺の言葉が終わる間もなく望の首がギリギリと音を立てながら俺のほうを向いた。

「とうとう朔も踏み込んではいけない領域に踏み込んだか。ガンブラや小さなシャナのフィギュアなら大目に見てきたけど、いくら彼女が出来ないからってこんな物までネットで隠れて買っていたなん

て奥歯をガタガタ言わせても許さないからね！」

そう言いながら可愛らしいパジャマ姿の望が指をボキボキ鳴らしながら俺に向ってくる。

既に俺の奥歯はガタガタと音を立てていた。

そして望の顔は……

鼻筋が通り少し切れ長の目は釣りあがり、ついでに口元まで釣りあがっている。

少し日本人離れた茶色い瞳は真っ赤に燃え滾って炎がメラメラと

……

にこやかな時は万人受けするくらい可愛い顔なのに今はまるで

……

地獄の閻魔様以上で。

言い終わる間もなく見事としか言いようの無い、激流を流れ落ちる水のような望の絶妙なコンビネーション技で俺は彼女を隠さなくてもイメージしたとおりに天に召すか地獄に堕ちる寸前になる。

「朔の事だから名前でも付けているんでしょ」

「っ、付けてない。初音ミクって名前が」

「それは製品名でしょ」

「ち、違うつて製品名でキャラの……ギブ、ギブ！」

バックチョークを掛けられて望の腕が首に食い込み意識が朦朧としてきた。

望の腕をタッチしても腕の力が抜けずに、本当に意識が吹き飛ぶ寸前に再び望が質問を繰り返した。

「朔が付けた名前を言いなさい」

「だ、だから……」

薄れていく意識の中で暴走した望に何を言っても通じないのは、子どもの頃から良く判っていた。

マジで落ちる寸前に咄嗟に思いついた言葉を口にしていった。

「る、るな……」

「ルナか悪くない名だけど、ちょっとしたミクのままで良いよ」

「それじゃ、ミク……」

「ハイ マスター」

「……………」

少し機械的な声がした瞬間に望の動きがピタリと止まる。

人間って言う生き物は本当に慄いた時には声が出ないものなのか。

次の瞬間……

「§ # * ¢ !」

言葉で言い表せない様な望の絶叫がしたかと思うと、今度は望が奥歯をガタガタ言わせながら信じられない身体能力で数メートルは離れている玄関のドアに背中をぶつけて止まり。

見てはいけない物が見えない物を見たかのようにしゃがみ込んで怯えていた。

俺はと言うと酸欠状態の頭が少し楽になった瞬間に、頭を床に叩きつけられて意識が一瞬だけ吹っ飛んでいた。

望

望はすこぶる明朗快活だが極度の怖がりで特に見えざる物の幽霊やお化けが大嫌い。

冗談でも何か居たなんて言おうものなら信じられないような火事場の馬鹿力とでも言うべき力をもって、言った相手を殴り飛ばしてしまつか逃げ出してしまうかのどちらかだった。

「あんな、マジで昇天しそうだったぞ。絞殺か撲殺だな、どっちも勘弁してもらいたいな」

「……………」

望がベッドの上にいる初音ミクを指差して口をパクパクさせガタガタと音を立てて震えている。

それはそうだろう、フィギュアだと思っていたらいきなり喋り出したんだ。

フィギュアそれも一分の一サイズが喋り出したら薔薇乙女も魂消てしまっだろう。

仕方なくフラフラする頭を擦りながら起き上がり望の側に行きしやがみ込んだ。

「望、彼女はお化けや幽霊じゃないからな。大丈夫だ、安心しろ」

「そ、それじゃ人間なの？」

「うゝん、ちよつと違うかな？」

「ふえい、やつぱり人じゃないんだ」

首を横に振りながら望の目から涙が溢れてきた。

望の質問に戸惑ってしまう、どう説明したら理解してもらえらるだろうか？

一番判りやすく一番手っ取り早い方法を取る。

昨夜の夢だと思っていた事を包み隠さず望に話すと、話終える頃には望は落ち着きを取り戻しつつあった。

そして一言。

「触っても大丈夫？　噛み付いたりしない？」

「大丈夫だと……だ、大丈夫です」

曖昧な返事をする俺の背中に隠れる様にしていた望が俺のわき腹を摘み上げてきた。

「おいで」

言葉を解するなら反応するはずだ。

そう思い躊躇いがちに俺が優しくミクに声を掛けると嬉しそうにベツドから立ち上がって俺に向ってきて目の前まで歩いてきた。

身長は160センチ弱だろう望みより少しだけ低い気がする。

不思議な色の髪の毛はツインテールで膝下くらいまでの長さがある、そんな事を考えていると望が恐る恐る彼女に触っていた。

最初は指でチョンと突っついて、次はそつと掌で触れる。

そして彼女が実体である事が確認できると服や髪の毛まで遠慮なしに触るがミクは俺の顔を見て微笑んだままだった。

「朔の夢物語は全く以って信じられないけど、彼女は本当に人間みたいだね、体温も感じるし。唯一違う所は機械的な声とコミュニケーション能力かな。これだけ触られて嫌な顔もせずに朔の顔をつて、何をしているの？」

「い、嫌。ミクが急に」

彼女が俺の首に両手を回してまるで……

キスするような姿勢で……気を失っていた。

慌ててベツドに凭れさせるように彼女を座らせる。

「まるで電池が切れた人形ね。お腹でも空いたんじゃないの？　今すぐに朝食の準備をするから朔は彼女をしっかりと見ててあげなさい」
「判ったよ」

先程まで怯えていたのが嘘のように彼女を瞬時に分析し、まるで俺の事を年下扱いして朝食の準備をすべく部屋を出て行った。

実は妹の望は俺の隣の部屋に住んでいる。

それは親の遺言もと言いつけで。

俺と望の父親は仕事の関係で海外赴任が多く、何も出来ない父と一緒に母親も今はドイツの方で暮らしている。

そしてそんな両親の言いつけを真面目な望は律儀に守っている訳だが、そのお陰で父親の事をどうこう言えない位に何も出来ない俺が生きて居られるわけだ。

部屋も小奇麗にしてもらって食事は望が居る時は望が作ってくれて身の回りの世話をしてもらっているのが現状だ。

その所為で俺に対する周りの風当たりが冷たいのが気になるが、俺にはどうする事も出来ないで居る。

何故なら何度と無く逃げてても望は自分の持ち合わせている能力を遺憾なく発揮し、俺の所在を突き止めてしまうのだ。

どれだけの能力かと言えば身体能力の方は説明する必要が無いだろう。

頭の方はと言うと、言わずと知れた日本一の大学にトップ入学してしまうくらいで、現に今は三期生で三期連続トップの成績を修め主席卒業は確実だと言われている人望も厚く人脈は半端無く広い。

容姿端麗、頭脳明晰、品行方正で文武両道を地で行く完璧超人みたいな妹の出洩らしが俺で。

望の弱点と言えば怖がりな所なんだが、そこが萌え要素炸裂らしく『望、叶えたまえ』なんて大昔にどこかで聞いた事があるような、

アイドル顔負けのファンクラブまで出来ていて優等生からヲタク塗れの学生が名を連ねているらしい。

そしてもう1つ……おっと。

その時に俺の携帯が着信を告げお気に入りの曲が流れるとミクの体がビクンと動いた。

そして初めて出会った時の言葉が頭に鮮明に蘇る。

『ウタ ヲ オシエテ アナタ ノ コエ ヲ キカセテ ケイヤク ノ アカシ』

もしかしたら、携帯の着信など無視してパソコンを立ち上げて急いで音楽が焼いてあるCDを漁る。

『S o t t e B o s s e』の文字が目についた。

確か最近の曲をヴォサノヴァやジャズにアレンジしてカバーした曲だった。

立ち上がったパソコンでCDを流すとゆっくりとミクが体を起こして耳を傾けている。

そこに望が朝食のトーストやサラダにスープを載せたトレーを運んできた。

「朔？」

「シー」

望が声を掛けようとしたので口に指を当てて制すると、直ぐに望は小さな声で話し始めた。

「朔、何なの一体？」

「多分、ミクの栄養源は食べ物じゃなくて音楽なんじゃないかと思うんだ。元々そう言うソフトだし」

「はあ？ 朔が言っている意味がいまいち判らないけれど、それが当たっている様なら褒めてあげる」

褒めてあげる？

別に妹の望に褒められても、ちっとも嬉しくないのだが突っ込もうとして流す事にした。

再び昇天なんて2度と御免だからだ。

「彼女、初音ミク（製品名）はボーカロイドって言う楽曲を歌わせる為のソフトなんだ、だから」

「音楽が食べ物でっ事？」

「多分、試してみなければ判らないけれどね」

『S o t t e B o s s e』のボーカルC a n aの優しい澄んだ歌声が流れる中で朝食を取ることになる。

小さなテーブルに既に3人分の朝食が並べられていた。

「いただきます」

「どうぞ」

望は未だに信じられないと言う顔で俺の顔を見ている。

俺が美味しそうにトーストを頬張るとミクも真似してトーストに齧りついて不思議そうな顔をしている。

「美味しいか？ まあ美味しいかと聞かれても判らないかな？」

「キラリジャナイ デモ マスター ノ ウタ ガ オイシイ」

「マスターじゃない、俺の名前は朔だ」

「マスター ナマエ サク」

「そうだマスターじゃなくなつて朔って呼んでくれないか？」

「サク」

「良い子だ」

俺が自分の事を指差しながら名前を教えろと何とか理解してもらえたようだった。

それと不思議な事に時間が経つにつれてミクのボキャブラリーが増えていく事に気付いた。

「少しずつ周りの会話や音を聞いて学習しているみたいね」

望に先に言われてしまったこの辺が頭の回転の違いなのだろう。

「朔も本当は出来る子なのになんでかな？」

「そんな事、俺に言われても知らないよ」

「ほら、彼女のご要望どおり朔の歌声を……ゴメン」

そこまで言っておいて普通謝って俯くか？

まるで睨み付けた俺が悪者みたいじゃないか。

そこで自虐的一計を案じる。

「それじゃ、望が俺の代わりに歌を……」

「私が絶望的に音痴なのを知っていてそんな事を言うか？ 朔？

死んで見るか？」

言うが早いか望みのさほど大きくない掌が俺の顔を掴み、俺の頭蓋骨が変な音を立てながら軋んでいる。

死んで見るか？

時期にこのままじゃ頭蓋骨粉碎で死にますから。

歌が嫌いつまり音痴なのが望のもう一つのウィークポイントだった。

するとクスクスと優しい笑い声が聞こえてきて俺と望が顔を見合わせた。

なんと言う速さで学習をしているのだろうまるで乾き切ったスポンジが水を吸い込むようにミクは色々な事を吸収している。

「これじゃ、迂闊に汚い言葉や感情なんて表せないじゃない」

「感情？ 言葉は判るけど何で？」

「あのね、朔。良く聞きなさい。彼女は私と朔の兄妹喧嘩を微笑みながらずっと見ているの。と言う事は喧嘩が本気じゃなく愛情に裏打ちされた物があるからだと推測できるの。あくまでもこれは私の主観で憶測にしか過ぎないのだけど。他人同士が喧嘩なんてしていたら笑いながら見ていられると思う？ 嘘んこ無しの本気で罵詈雑言が飛び交うのよ、感情が剥き出しの」

「そうか、だから望は言葉の裏にある感情もミクが読み取ってしまうと。ってそれじゃ望の言葉の裏には……へブッ！」

「当たり前でしょ。双子の兄妹なんだから」

顔を真っ赤にした望のコンクリートすら粉碎してしまうかの様なデコピンが俺の頭に炸裂した。

「ブラコン」

「ロリコンの朔には言われたくない」

「……誰が？」

「朔が」

「なんで？」

望がミクを見て顎を軽く突き出した。

「……判った。ヲタク呼ばわりは我慢できるけれどロリ呼ばわりは我慢できない」

「さ、朔？ どうする気なの？」

「仲間にミクラブな奴が居るから」

携帯を持ってそこまで言いかけて立ち上がろうとすると望の鋭い眼光が突き刺さる。

これ以上動いたら確実に仏壇の鈴りんをチン〜と鳴らす事になるだ

ろう事が確定してしまうほどの殺気だった。

「わーたよ、俺がロリ呼ばわりされるのを我慢すれば良いんだろ。ヲタクだもんな当然だよな」

「そこまでは言わないけれど朔のヲタク姿だって仮の姿じゃない」

「これが本当の姿だよ。まあ良いさ、夢だと思っつてつい歌っつしまつてミクと契約してしまったのは俺なんだから自分のケツは自分で拭くよ」

「契約っつて歌で？」

「なんだか仮契約がどうっつて言っつていたような気がするけれど寝ぼけてて曖昧であまり憶えて無い」

「朔らしいね」

それ以上、望は何も言わずに涼しい清まし顔をして朝食を食べ始めている、こんな顔をしている時には何かに気付いた時か好からぬ事を考えている時のどちらかだった。がそれは俺の範疇を遥かに越えている事だった。

支度

食事も終わりジーンズに穿き替えて上はＴシャツにピンストのシャツを着て、いつもどおりの普段着に着替えていると午後から講義の望が声を掛けてきた。

「朔、彼女をどうするの？」

「仕事に連れて行くわけにいかないだろ」

「置いていくつもりなの？」

「それじゃ、どうしろと？」

「朔の仕事先は一度出てしまえば戻るまで自由なんですよ。午前中は見ていてあげるから午後は迎えに来なさい」

「面倒臭いな」

「あんたがマスターなんですよ。それにしてもこの服じゃ目立って仕方が無いわね、着替えさせるけど良いかしらご主人様？」

「どうぞ、ご自由に。ご主人様言うな」

俺も今日はゆつくりの出勤だからと思いのんびりしていると、望が自分の部屋からファッションショーが出来るんじゃないかと言うくらいの色んな服を持ってきた。

床にドスンと音がするくらいに置かれた服を一枚取ってみると望が着るはずも無い様なフェミニンな服ばかりだった。

望は不思議な事に普段着は殆ど俺と代わらない様な動きやすい格好しかない。

前に理由を聞くと何かが現れた時にスカートだったらパンツ丸出しじゃ逃げ出せないでしょなんていう単純明快な答えが返ってきた事がある。

確かに言っている事に一理あるかも知れないが、どれだけ怖がりなんだと思った事があった。

実際問題として俺自身は望の大学での生活を見たことがある訳じゃないが、大学には驚いて逃げ出さなければいけない様な事があるの

だろうか……

「って、何処で着替えさせているんだよ。ここは男の俺の部屋だぞ」

「女の裸なんて別に減るもんじゃないんだから良いでしょ」

「本当に望は女なんだろうな」

「朔には見せているでしょうが、私の自慢じゃないけれどナイスボーディーを。朔以外の男なんかに見せた事無いんだから」

溜息しか出てこない。俺の目の前でそんな事を言いながらミクの服を脱がせ始めている。

何も判らないミクだから素直に望の言う事を聞いてされるがまだまだけど、他の女の子なら確実に悲鳴を上げるか俺を張り倒しているだろう。

それにそんな事を21にもなつて自慢する事なのか？ 双子の兄貴の目の前で平然と着替えをする同い年の妹って……十分に問題ありだろう。

それに俺以外に見せてないって言う事は未だに……

殺気を感じて目を伏せるようにして俯いていた頭を上げようとする
と後頭部が何となくひんやりする。

咄嗟に頭をずらすと今まで俺の頭が在った場所に望の踵がもの凄い勢いで落ちてきピタリと止まった。

「あ、あぶねえな。直撃したら確実に死ぬぞ」

「ちゃんと避けたじゃない、朔にも私と同じ様な身体能力があるはずなの。出廻らしたと思っっているから駄目なのよ」

「それよりこの服の山は何なんだ？」

「貢物よ、どうしても私に着て欲しいって。断つても次から次へと持ってくるの」

「流石だな、望は」

「そうだ、小遣い稼ぎを依頼するわ。彼女に必要な無い服はオークションに出品して頂戴、取り分は五分で良いから」

「また、面倒臭い依頼をするなよ。オークションはやり取りが面倒なんだ、安物じゃないんだろ、タグも殆ど付いたままだから買取専門の店に持って行った方が楽だ」

「どっちでも構わないから宜しくね」

「了解した」

望とミクに背を向けながらOKサインを出すと望の声がした。

「朔、どう？」

「ん？……良いんじゃないか、似合ってて。うわぁ、こんな時間だ。ヤバイ遅刻する」

ミクは見蕩れてしまいうくらい可愛らしく仕上がっていた。

秋らしい柔らかめのオフホワイトとグレーのボーダーのニットワンピースで超ミニって……

「短すぎないか？」

「彼女の年齢は？」

「16、7だろ」

「それじゃ良いじゃない若いんだし。Aラインでティアードのドルマンスリーブよ、袖も広がっていてフェミニンこの上なく、このオフショルダーで男なんてイチコロって感じが素敵じゃない」

「何でも良いけれどレギンスか何か穿かせておけよ。俺は仕事に行くからな」

そう言って立ち上がるとミクが目を細めて少し哀しいような目で俺を見上げていた。

仕方なくおれはミクの頬に両手を当て。

真っ直ぐに吸い込まれそうな不思議な色の瞳を真っ直ぐに見つめてミクに言い聞かせる。

「良いか？俺の名前は月島 朔だ、忘れるなよ。何があっても俺がお前を守ってやる良いな」

「ツキシマ サク？朔！」

ミクに名前を呼ばただけで少しだけドキツとした、それは機械的な言葉に聞こえず人が呼ぶのと同じに聞こえたからかもしれない。

しかし、俺にはそんな事を思考している余裕が無かった。

ミクの額に軽くキスをして部屋を飛び出した。

「望、後は宜しくな。行ってくる」

「ふわぁ、久しぶりに男らしい朔を見たよ。やっぱりあれが本物だな、その為に朔の目の前に現れたのかな？」

望が期待の籠った嬉しそうな瞳でミクを優しく見つめていた。

ハル

俺は黒のブルズンを掴んでマンションの階段を駆け下りて、1階に停めてあるバスパ125に跨りエンジンを掛けて職場に向った。仕事場はマンションから30分ほどの場所にある事務所だった。

更衣室で制服に着替えて出勤するなり所長に名指しで呼ばれてしまった。

「おはようございます。所長どうしたんすか？」

「おはよう。月島は何で電話に出ないんだ？」

「電話すか？」

所長に言われて気付いた、確か携帯が鳴っていたがミクの事が心配で無視したのを。

適当に言い訳をして誤魔化す。

「すいませんでした。シャワーを浴びてたんで」

「まあ、それなら仕方が無いが着信に気付いたら電話ぐらい出来るだろうが。今日は3便周って貰おうと思ったが他の奴に頼んだよ」

「すいませんでした」

「早く出るよ」

「うーす」

「返事くらいちゃんとしろ、だからヲサクなんて呼ばれるんだぞ」

「それじゃ出まーす」

俺の仕事は都内の店舗に荷物を下ろすルート配送の仕事をしている、時々早い1便の時があるが生活できれば良いと思っているので出来る限り2便からのシフトに組んでもらっている。

その方が時間的にも余裕が持てるからだ。

便と便の間の時間は自由に出来るわけだし、きちんと配送さえしていれば他の事には何も煩くなく休みも意外と自由に組めるのが良いところだ。

それに何よりもマンションからそれほど遠くに行かずに仕事が出来

るのもこの事務所を選んだ理由だった。

手配済みの荷物を会社の2台トラックに積み込んで事務所を出発する。

最初の店舗の駐車場にトラックを停めて、荷物を降ろして店舗に入る。

「おはようーす」

「おはよう、今日はヲサク君が相変わらず眠たそうな顔だな」

「はは、朝方までネットで小遣い稼ぎをしてたんで」

「本当に？ 変な事はしてないだろうね」

「やだな、健全な打ち込みの仕事ですよ」

「本当に？ ネットオタクなんて良く判らないからね」

そんな良く判らない物を変な事と言い切ってしまうのが未だに根強くあるヲタクのイメージなのだろう。

そして事務所の上司もそうだったが俺がこの容姿でネットばかりしているので月島「ヲタク」と言うイメージが出来ていて、俺自身もヲタクである事をカミングアウトしているので俺の名前に引っかけヲサクと呼ばれているが全く気にしてはいなかった。

アニヲタ、ガンヲタ、ネットヲタ。ドンと来い。

今やヲタドルなんて言うヲタクのアイドルがテレビや雑誌でもてはやされヲトメなんていう女の子のヲタクまで現れ。

果ては秋葉には店ドルなんて言うお店に所属しながら活動するアイドルや、『男の娘』で『オトコノコ』とよぶ美少女にしか見えない女装した美少年まで現れ萌えの対象になっている。

カオス状態で細分化され過ぎて訳が判らない事になっているのが本当の所だ。

「しかし、ヲサク君はいつも時間に正確だね」

「まあ、それだけが取り柄みたいなもんですから」

商品のチェックをしてもらい次の店舗に向う。

そして最初の便の最後の店舗に荷物を降ろして次の便までの時間に望に言われたとおりミクを迎えに行こうと考えていると携帯が着信を告げる。

液晶には望の名前が浮かんでいる、遅かったか覚悟を決めて電話に出る。

「もしもし、これから迎えに行くから」

「ゴメン、朔。彼女を知らない？」

「あのな、望。端折り過ぎだ、意味が判らない」

「私が目を離れた隙に朔を探しに外に出ちゃったみたいで」

「はあ？ ……あの格好でか？」

「うん、私のブーツが無いから裸足じゃないと思うけど」

「そんな問題じゃないだろ。望は時間だから大学に行け、俺が探す」

「でも私も」

「望がどうやって探すんだ？ 望の事だからマンションの周りは探してみたんだろ」

「うん」

携帯を切り急いで電話をかける、相手は親友の一人だと思っている奴の店だった。

「おう、ツツキーか久しぶりだな。ベスパの調子はどうだ？」

「あん？ 快調だよってそんな事を暢気に言っている場合じゃねんだ。ハル、女の子を捜して欲しいんだ」

「女の子？ 店の前を色んな女の子が歩いているぞ……って。はあ？」

「おい、ハルどうした？」

ハルの声が突然途絶えた。ハルは晴海^{はるみ} 悟^{はな}と言って俺の親友だ、バイク屋の一人息子でハルの親父が隠居してからハルが店を仕切っている。

俺にスペシャルハルチューンだと言い張ってベスパを押し売りしたのもこの男だった。

「め、目の前を水色の髪をした女の子が男達に追い掛けられている

みたいに走ってた」

「その子を捕まえてくれ、事情は後で説明するから。借りは必ず返すから、頼む」

「ウィツシャー！ その言葉忘れるなよ。望ちゃんに久しぶりに会わせて貰うからな」

ハルの雄叫びが携帯の向こうから聞こえてくる、今はそんな事よりもハルのバイク屋に向かう事が先決だ。

ハルに任せれば何とか確保はしてくれるだろう。

なんてたつて奴はバリバリの走り屋上がりで言うなればバイクヲタクとも言えば良いだろうが、そして俺の妹の望の信者だからだ。

携帯を自動着信にしてトラックに取り付けてあるハンズフリーで会話が出来るホルダーに携帯をセットすると程なくハルから着信が届いた。

「捕まえたか」

「何とか捕まえたけどよ、なんだかメチャ怯えてて、俺の顔を見ると泣き出すんだよ。こんな女の子を見ているの俺耐えられねえよ」

「耐える！ ハル。男だろうが。あと少しで店に付くから」

「でも……」

信号が青に変わりトラックを出す。

今、走っている国道は片側2車線でハルのバイク屋とは反対車線になる。

確かUターンするにはハルのバイク屋を通り過ぎてかなり先まで走らなければならないはずだ。

ハルの話では大勢の男に追いかけて怯えきつて暴れまわり確保するのが大変だったらしい。

それはそうだろうミクは言葉に隠れている感情まで読み取ってしまうのだから。

その上に超が付くほど硬派であるハルにとってリアルな女の子が怯えきっている姿を見て慌てふためいている。

時間が無いことは明白だった。

仕方なくハルのバイク屋とは反対の車線にトラックを停めて左右を確認して駆け出し、中央分離帯の柵に手を掛けたときにミクが外を見て俺と目が合った気がした。

するとハルの叫び声と同時にミクが俺の名を呼ぶ声が聞こえる。

「月！」

「朔！」

「来るな！！！」

俺の声は通り過ぎた大型トラックに遮られ、トラックが通り過ぎた瞬間にミクが車道に飛び出してきてしまう。

左から再び大型のトラックが走ってくる、躊躇無く俺は全力で駆け出しミクの華奢な体を抱きしめてダイブしていた。

劈くようなクラクションが真横に聞こえる。

視界がスローモーションになり、アスファルトが足元を流れて行く。背中に衝撃を受けるとトラックが何事も無かったかの様に走り去る。そして歩道側の車線から乗用車が急ブレーキかけながら突っ込んできた。

「クソ！ 行け！」

右手でミクを抱きしめ左手で体を起こして少し持ち上げ。

有らん限りの力で右足をアスファルトに蹴りつけて体を歩道へと投げ出す。

蹴り出し伸びきった右足に軽い衝撃を受けるが気にしている余裕は無かった。

何とか歩道に転げ出し、気が付くとハルの店の前に停めてあったバイクの下敷きになっていた。

「馬鹿野郎！ 気をつけろ！」

罵声を残して乗用車が走り去った。

「おいおい、ツッキー大丈夫か？ しかしお前の運動能力は半端ないな」

「そんな事より大丈夫じゃねえ、重いし痛い」

「お、悪い、悪い」

「相変わらずハルは相変わらずDQNだな、普通は直ぐにバイクを退かすだろうが」

「悪いって、お前だって元DQNだろうが」

俺の体に倒れ込んでいたバイクを起こすのが遅れたハルに悪態をつく、そして恐る恐る腕の中を見るとミクの顔が引き攣って強張ったままだった。

俺がミクの顔を覗き込むと怯える瞳が揺れている。

呼吸を整えて少し大きく息を吸う、するとハルが俺の肩を掴んだがお構いなく口を開いた。

「良かった、怪我は無いかな？」

俺の口から出た言葉は怒声ではなくミクが無事でよかったと言う心からの安堵の声だった。

ミクの瞳から涙が溢れ出し俺の服をギュッと掴んで、声を上げながら泣き始めた。

どうする事も出来ずに座り込んだままミクを優しく抱きしめる。

「焦ったぞ、ツッキーが打ち切れるかと思ったぞ。お前が切れる直前は必ず大きく息を吸うからな」

「それで肩を？ 俺は昔みたいな刃じゃないよ」

「切れなくなっただわりに引き籠もりだもんな」

「切れないだけで怒りはするぞ。今だって無性に腹が立っている。まあ、自分自身にだけどな」

ミクを危ない目に遭わせてしまった自分自身に腹が立った。

もう少しだけ慎重に遠回りでも車を回せば良かっただけの事だから小さく息を付いて奥歯を噛み締めて、俺の胸にしがみ付いているミクを見ると揺れる瞳で見上げ何かをいおうとしている。

言おうとしているが言葉が出てこないと言うより知らないと言う方が正しいのかもしれない。

「ゴメンな、危ない目に遭わせてしまって」

「ゴメン、ナ……」

「ん？ ゴメンなさい、かな？」

「ゴメン ナサイ」

人の感情にも敏感のようだ、それは俺が契約者だからなのかもしれないが今はどうでも良い事に思えた。

ミクにゆつくりと判り易い様に話しかける。

「どうして家から出てきたんだ？ 望が心配しているぞ」

「朔 シゴト。ノゾミ イナイ。 ヒトリ イヤ」

「それで捜しに出てきたんだな」

「ウン オナカ スイタ。 歌 キコエタ」

望は目を離れた隙にと言っていた、俺は仕事に行ってしまい望は自分の部屋にでも着替えに行っていたのだろう。

独りぼつちにされたと思い母親の姿が見えずに不安になる子どもの様に咄嗟に捜しに出てしまったのだろう。

歌が聞こえた？

あれか……

なんでもこの近所の国道沿いのファミレスでアニメのイベントがあつて、確かワグナ何とかと言うファミレスを舞台にしたアニメのイベントだったと思う。

声優さんが来てトークショーや歌を……

確か出演するのは声優さんの名前は阿澄佳奈さんと藤田 咲さんで、2人ともとても可愛らしい声優さんで2人とも歌を歌っているはずだ。

そして藤田 咲さんは……

「ふふふ」

「朔、オカシイ？」

「何でもないよ」

自然に笑いが込み上げてきた。自分と同じ声に引き付けられるって。で会場に？ ミクが？ それは追い掛けられるな、確実に。

そして明らかに血迷ったヲタクは車より遙かに危険だったに違いな

い。

ハルはどうやって……考えるのを止めた。

「や、ヤバイ休憩時間が終わる」

時計を確認するともう直ぐ次の便の時間が迫って来ていた。

ミクを連れて行く訳にも……

「ハル！」

「へい？」

「ミクを預かってくれ。優しく接すればミクは絶対に怖がらないから」

ハルの返事も待たずにミクを抱きかかえたまま立ち上がろうとする
と右足首に激痛が走り倒れそうになる、寸でのところでハルが仕事
に使っているジャイロUPのシートに寄りかかった。

「クソ、痛めたか？」

「違うな、車と接触したんだな。見てみ」

ハルに言われて路肩を見ると割れた乗用車のウインカーの破片が落ちて
いる。

拙いな、捻挫なら良いが最悪だと骨が逝っている可能性がある。

仕方なくミクの事を隠す為に嘘を交えて事務所に報告して交代のド
ライバーを手配してもらい、タクシーでも拾って病院へと思ったが

……

「やれやれ、結局このアニメから飛び出してきたような女の子を預
かるのかよ。苦手なんだよ、俺」

「悪いな、そうだCDでも聞かせておけば大人しくしているはずだ
から」

「はあ？ 音楽を聞かせておけって？ 俺んちにはこんな可愛い子
に聞かせるようなCDは……あつたな確か、本当に良いのか？ 昔
のCDだぞ」

「仕方が無い、緊急事態だ。封印を解くよ」

その時、俺の制服をミクが握り締めた。

俺があまりにも痛そうに喋るので不安なのだろう。

「ミク、良いか必ず俺が迎えに来るからしばらくは悟のところでも聞いていてくれ。悟の性根は良い奴だからな」

「おいおい、性根って見た目は」

「良い男だがヤンキーが顔に出てる」

「サトル？」

どう見ても年下のミクにハル呼ばわりされるのは嫌だろうと思いハルの下の名前でミクに言い聞かせると、突然ミクがハルの名前を口にした。

「えっ、お、俺、さ、サトル」

「ハル、ミク並みの喋りになってるぞ」

「良いから病院に行って速攻戻って来いよ、何時間も耐えられねえぞ」

「それじゃ頼んだぞ。それとここに電話してミクを見つけた事を教えてやってくれ」

ハルに電話番号を書いたメモを渡して、ミクを託すとミクが寂しげな瞳で俺を見ている。

それはまるで……堪らずミクを抱きしめていた。

「直ぐに戻るからな、大人しく良い子でいてくれ、良いな」

子どもに言うようにミクに言い聞かせると安心したのか大きく頷いてくれた。

痛單車

タクシーを拾い近くの総合病院に向う、そしてレントゲンを撮り診察を受けガチガチに足首を包帯で固定されてしまった。

医者の説明では靭帯損傷までは行かないが捻挫と打撲でかなり酷いと言う事だった。

診察室を出ると望が今にも泣き出しそうな真っ青な顔で立っていた。ミクの事が心配で講義にも身が入らないだろうと思いハルに連絡させたのが裏目に出てしまったようだ。

「朔、大丈夫なの？ 事故だったって……」

「はあ？ あの馬鹿。ハルから話を聞いたんじゃないのか？」

「聞いたから大学から飛んで来たんじゃない」

「乗用車にちよつと足を引つ掛けただけだよ。打撲と軽い捻挫だ1週間もすれば治るよ、こんな怪我しよっちゅうだっただろが」

「はあ……良かった。心臓が止まるかと思ったんだから」

「ゴメンな、心配かけて」

「本当にハルちゃんは何でちゃんと話せないのかしら。電話が掛かってきて晴海 悟なんてフルネームで言うから思わず『誰？』って聞き返したら泣き出しちゃってグジュグジュで」

ハルが携帯を持ったまま男泣きしている姿が浮かんでくる。

望は頭が良いくせに俺の友達のニックネームは良く覚えているのに本名は殆ど覚えていない事が多い。

「可哀想に、久しぶりに望と話をさせてやろうと思ったのに」

「で、彼女は？」

「ハルに預けてる」

「……………」

放置ですか？

ハルの事をすつ飛ばして、ミクの事を聞いてきたので即答すると…

…

今まで顔面蒼白でオロオロしていたのに、望の綺麗な顔が怒髪天を突く如く見る見る般若の様になっていく。

「ワンス モアー プリーズ？ 朔」

「あはは、急いで迎えに行かなきゃミクが待っているから」

踵を返し右足を引き摺りながら玄関ホールに向おうとすると制服の襟首を掴まれた。

背筋に冷たいものと言つか悪寒が走る。

「逃げるな、朔。私も一緒に行くから」

「あのな、望ちゃん？ ハルは何も悪くないからなくらハルがDQNだったからって、今は真面目にバイク屋を継いでいるんだしね」

「朔は煩い。そのハルちゃんに用事があるんだ」

「あはは」

乾いた笑いしか出てこなかった。

用事じゃ無いよね、望のその顔は。強制労働でもさせられちゃうのかな？

ハル、お前まで巻き込んでしまつて申し訳ない。

俺は心の中で天に召すハルに向かい手を合わせた。

望はタクシーの中でブツブツとひとり言を言いながら親指の爪を噛んでいた。

この親指の爪を噛む癖が出ていると言う事は望のスーパーコンピューター並みの頭脳が何かを考えて居る時だった。

徐に携帯を取り出して望が難しい顔をしながら何回も電話をしていた。

そして溜息を一つついて携帯を閉じて前を向いたまま俺に話しかけてきた。

「朔、彼女は今何をしているの？」

「ハルんちの二階で音楽でも聴いていると思うけど」

「あのね、朔。ハルちゃんの音楽の趣味は最悪なんだよ」

確かに出合った頃からハルはメタル系が大好きでギンギンだったけ

ど……最悪って、言い過ぎだろう。

「昔のCDでも聞かせておけって言ってるから」

「へえ？ 昔のってまさか……」

「緊急事態だから封印を解いたける？」

「ぷっ、そうか」

それだけ言つと望はタクシーの運ちゃんが驚くほど腹を抱えて笑い出し『悪いようにはしないから』とだけ言つて笑い転げていた。

程なくしてハルのバイク屋が見えてくると、不思議な髪の毛の色をしたミクとハルがバイクを挟んでしゃがみ込んで何かを話していた。
「サトル、ゴメンチャイ？」

「う、うう……ドキュンと来るな……」

タクシーから降りると真っ先にミクが俺に気付き駆け出してくる。

片手を突き出して満面の笑顔で走ってくるミクを制して、真っ直ぐにミクを見ると少しだけ不安そうな顔をした。

「ミク、心配を掛けた望に言う事があるんじゃないのか？」

「ノゾミ ニ？」

何かを考えているようにミクの瞳が少しだけ泳いでいる、直ぐにハツと気付いたように望の前に駆け出した。

「ノゾミ、ゴメン ナサイ」

「もう、しょうがない子ね。今回だけは許してあげる、2度と何も言わないで出ていちゃ駄目よ」

「ウ、ウン？」

少し悩んだようにミクが返事をする。望が安堵の表情を引き締めて子どもに教えるようにきちんと言い聞かせた。

「判った時の返事は『ハイ』よ。判りましたか」

「ハイ！」

子どもの様に返事をする嬉しそくに望に抱きついた。

「もう、本当に子どもなんだから。それに抱きつく相手が違つてしょ」

「ノゾミ？ 朔 オコッテル？」

「朔が怒るわけないでしょ。だって……」

望がミクの耳元で何かを呟くとミクが困った様な表情をして俺の顔を見る。

もどかしくて照れ隠しに頭を掻くと望が上から目線で先手を打ってきた。

「ほら、朔。彼女を不安がらせないの」

「はあ。ミク、おいで」

「ウン！ ハ、ハイ」

「俺と話すときは『ウン』で良いから」

「ウン！」

再び満面の笑顔で俺に向って駆け出してくる、今度はちゃんと受け止めると望が意味ありげに俺とミクを見ている。

「本当に朔は甘いんだから。でもきちんと駄目なモノは駄目って言える見たいね」

「あんな、礼節を弁えろって俺の体に叩き込んだのは望だろうが」

「当然でしょ、周りからは暴走族扱いされてたんだから」

仕方が無い事なのかもしれない。バイクを乗り回す「暴走族」という構図は多かれ少なかれ世間の中では一般的に思われている事なのだから。

そんな事を考えていると抱きついていいるミクが俺を見上げて嬉しそうに話しかけてきた。

「朔！ サトちゃんオモシロイ」

「そうか、良かったなって……」

「ハルちゃん？ DQNがドキュンって彼女に何をさせたのかな？」
俺が聞くのが早いか黒いオーラを纏った望が微笑みながらハルが男泣きしてしまいそうなキツイ一撃を喰らわした。

「うへえ？ の、望ちゃん？ お、俺は……べ、別に何も……ひ、酷いよ……今は真面目に……」

「ハル、お前はミク以下か？ ちゃんと落ち着いて泣かずに話しや

がれ！」

顔から血の気が引き今にもチビリそうなハルから望を少し離れさせて、俺が可哀相に半べそのハルに事情を聞いた。

CDを直ぐに聴き終わってしまい、もう一度聴くかと恐る恐る聞く
と首を横に振られ、仕方なく店に連れて下りて来て俺に言われたと
おりにハルなりに優しく子どもに話をする様に接したらしい。

「んで、何でサトちゃんなんだ？」

「あ、あのさ。この子になんて呼ばせたら良いか判らなくて子ども
の頃の呼び名なら大丈夫かなって」

「ハル？ 本当に硬派なのか？」

「だから昔から何度も言ってるだろ。女の子が苦手なだけだって、
どう扱って良いか判らななんだよ。俺は一人っ子で中学までは目つ
きが悪いだけで怖がられて。んで高校は俺馬鹿だから工業しか行け
なかったし」

「朔、サトちゃん イジメナイデ」

ミクがハルの言葉を聞いて何かを感じた様だった。

「苛めてないよ、これからハルと仲良くしてくれな」

「ウン！」

今日一日で飛躍的にミクの言語能力とコミュニケーション能力が上
がっている、怪我の功名と言っべきか。

ただ俺が側に居る時には俺にべったりなのが気に掛かるがマスター
なのだから仕方が無いことなのかも知れなかった。

「で、ハルちゃん？ お願いしておいた物は？」

「ええつと、親父が引き取りに、ほら戻って来た。それともう一つ
はもう直ぐです。はい」

いつの間にかハルは普段のハルになっている。

まあ、ハルも昔から望に弄り倒されている訳だし慣れても来るだろ
う、どれだけ望に弄られても望命のハルは超が付くほどDMだと俺
は思っている。

何をハルに頼んだんだと思ったらハルの親父さんが軽トラで俺のベ

スパを運んできた。

そして店の前に降りしてしばらくすると4台のカラフルなバイクが
つて……

「望、あれって？」

「見て判らない痛車のバイク版の痛単車じゃない」

らき すた・けいおん・灼眼のシャナにゲームのキャラから会社の
ロゴからアドレスまで綺麗にカッティングシールが貼られていてこいつ等

をどうするんだ？

望は何を考えているんだ一体？

そしてバイクから降りてきたライダーが呆気に取られてミクを見て
いた。

「うわあ、スゲ！ まじミクじゃん」

「ほ、本物なのか？」

「有り得んが、死んでも良いかも」

「さ、触っても？」

すると、ミクが怯えて俺の背中に隠れた。

恐らくこの手の男達に追い掛けられたのだらうと思ったが直ぐにミ
クが落ち着きを取り戻して笑顔に戻った。

「朔、ダレ？」

「ん？ 悪い人間じゃなさそうだぞ」

「イイヒト？」

「まあ、そうとも言い切れないけどな。ミクには難しい言葉だな」

「ウ、ウン」

不思議に思い望を見ると腕を組んで満面の笑顔でライダー達を見て
いると1人が驚いて声を上げた。

「ま、まさかあなた様は日本一のミスキャンパスの月島 望様では
？」

「ま、マジで？」

「まじミクに望様って2回死ねるのか？」

「うぉー後光が眩しい」

「一体何なんだこいつらは？」

同じヲタクの匂いがするがバイクを見ると凄く綺麗にチューンして
いるのが良く判る。

「朔、あんたも同じ様なもんでしょ」

「はぁ？ 俺が……望、それマジで言ってるの？ 俺はヲタクだけ
ど一緒なのか？ あつ、ある意味一緒か……」

なんだか直球で言われると凹んできた。

バイクが好きでヲタク、それが合わさるとこいつらか、俺も同類な
訳ね。

俺が溜息を付くと望がライダーの中でも一番リーダーらしき男に声
を掛けた。

「さてと、ここからが本題よ。彼女の親衛隊を結成したいのよ、お
願いでないかしら」

「僕らに？ 望さんの希望なら別に構わないですけど、俺たちは痛
單車に乗っていますけど走りにも自信があるんすよ。で、隊長は誰
に？」

「私の双子の馬鹿兄貴じゃ駄目かしら」

「はぁ？ このヲタク丸出しの？ バイク乗れるんですか？」

「あら、毎日ベスパには乗ってるわよ」

「ふえ？ べ、ベスパって。マジすか？」

4人が腹を抱えて大笑いしている、望に乗せられている気がして非
常に嫌な感じがするのだがここは乗るしかないのだろつ。

俺がどうするか躊躇っていると望の眉がピクピクと引き攣っている、
それは望みが打ち切れる寸前のサインでハルの顔も引き攣り始めて
いた。

俺がチンタラ戸惑っているのが気に入らないのだろつ。

「仕方が無い、乗ってやる。勝負だ」

「はぁ？ マジで言ってるの？ 止めるなら今のうちだよ」

「お前らなんか誰が負けるか。ハル、2ハンのバイクは？」

「今、2ハンはNinjaだけ」

「弄ってあるのか？」

「もち」

ハルがサムズアップしてにやりと笑う。

勝負は一発勝負だった。

ハルの店から10キロ先の望が指定した事務所に行き、荷物を受け取り戻ってくることに。

そしてあいつ等の400と俺の乗る250の単車勝負じゃ傍から見れば火を見るより明らかだった。

「バカ兄貴、そのNinjaをチョイスした時点でお前の負けだよ」

「本当、本当！」

「勝ち逃げだな」

「お粗末」

四人のお情けで俺が先頭で勝負が始まる。

インペリアルブルーのバイクに火を入れてアクセルを吹かすと心地よく吹け上がる。

直ぐ横でミクが微笑みながらバイクのエンジン音を聞いている。

「サトちゃんのバイク　キレイナ　音ガスル」

「そうだろ、ハルの腕は確かだからな。直ぐに帰ってくるからな」
「ウン」

ミク場

翌朝、電子音の代わりにミクの声で起こされた。

「朔、オキテ ヨンデル」

「ふわあゝ 判ったよ。何だ？ 望」

「ほれ、ベスパの鍵よ」

「ういゝす」

「それと、今日から彼女も一緒に職場に連れて行つてね」

「……………はい？」

ミクに起こされると部屋にはいつものように望がいた。

しばし思考が止まり、再び思考が動き出した時には望の顔が目の前にあった。

「You understand？」

「無理！」

「事務所には連絡してあるから。両親の知り合いの外国の女の子を急に預かる事になって、申し訳ないがトラックに便乗させてくださいって。マンションに独りで置いておく訳に行かないので付け加えてね」

「うつ……………了解いたしました」

もう一度無理と言おうとして言葉を飲み込んだ。

何故って気付いた時には俺の顎の下に望の手刀が突きつけられてキラんと光ったような気がして今にもざっくりと……………

3人で朝食を食べてから、俺とミクは事務所に向うべくエレベーターに乗っている。

俺はいつもと変わらない普段着だが今日のミクはチェックのワンピースにざっくりと編まれたニットのキャメル色のポンチョを羽織ってこげ茶色のニーハイブーツを履いていた。

マンションの下に停められているベスパを見て俺は固まってしまった。

昨日までオフホワイトだったベスパがミクの髪の色のような綺麗な彩度の高いペパーミントグリーンになっていて…… 初音ミクがカッティングシートで描かれてて……

これって痛單車じゃないか。

そこでハルが昔からカッティングシートでアイドルの顔などを切り抜き綺麗に車やバイクに張っていたのを思い出した。

その中でも一段と際立つ親衛隊公認のステッカーが貼られ親衛隊長の文字まで綺麗に切り抜かれ貼られていた。

俺もあいつらも望に乘せられた口だな、まあ、恐らくミクの事を考えてのことなんだろう。

昨日の勝負はあつけないものだった。

あいつらもかなり走り込んでいたがバイクと腕の差は歴然で俺が荷物を受け取りハルの店に戻ってしばらくして4人が流しながら帰ってきたのだ。

そして望の言葉が止めを刺した。

「やっぱり無理よね『ムーンライトダンス』のコンビに勝てるわけないか」

「へえ？ それじゃこの2人が？」

「そうよ、流石にバイクの走りに自信があるのなら知らない訳ないわね。そしてあなた達の相手は右足を負傷中なの」

「完敗す、何でも申し付けてください。望様」

「それじゃ良い事、今後、彼女に近づく不埒な輩を排除しなさい。

そして親衛隊の事務所はこのバイク屋よ。良いわね」

「了承しました」

そして俺が運んできた荷物が公認ステッカーだった。

望なら東京都なんて簡単に動かせそうな気がしてきた。

『ムーンライトダンス』はチーム名でも何でもなく、バイクを弄り

倒し走るだけのバイク馬鹿の集まりで。

月明かりの下を神出鬼没で集まり騒いで居たので『ムーンライトダ
ンス』なんて呼ばれ、数年前の事なのにいつの間にか都市伝説の様
になってしまっていた。

事務所に出勤すると皆の視線が集まるが特に騒ぎ出す者も居なかつ
た。

それはそうだろうヲタクの俺がお人形みたいなミクを連れていても
当たり前にしかなえないのかもしれないが、流石に視線だけは冷や
やかでいつも以上に突き刺さった。

そしていつもの様に荷物をトラックに積んで店舗周りをする。

誰のお陰か知らないがご丁寧におトマのトラックが配車されてい
た。

2便の荷物を配達し終えて昨日と同じ様にとりあえず親衛隊事務所
になってしまったハルのバイク屋に向かおうと国道を走っていると
やけに痛車や痛単車が目に付いた。

そして、時々ここは秋葉原かと思うようなコスプレイヤーが闊歩し
ていて、ハルのバイク屋に近づくのと店の前は広く開けられているの
に痛い車とバイクに自転車までが何台も連なっている。

けいおん！・トゥーハート・あそびにいくヨ！・タユタマ・なない
ろ ドロップスにヤンデレの元祖とでも言うべきSHUFFLE！
からラブプラスまで。

ありとあらゆるアニメのキャラからゲームのキャラまでつて、そこ
で1つだけ疑問がボーカロイドのキャラも有っておかしく無いと思
うのだが……

そんなヲタク塗れな事を考えながら開いているスペースにトラック
を停めると昨日の4人が駆け寄ってきた。

「お疲れ様でした」

「おついです。で、何なのこの騒ぎは？」

「昨日のミク騒動があつという間にネットで流れて一目会いたいと

言う輩からどうしても親衛隊に入隊したい志願者です」

「あのう、ミクさんは？」

「昨日の事があるから車で待ってるよ」

俺が言うまでも無く4人はトラックの助手席を覗き込んで手を振っていた。

「ハル、盛況で賑わってるな」

「ツツキー、繁盛するのは嬉しいけど体が持たないよ」

半泣きのハルの目の下には盛大にクマが出来ていた。

恐らく徹夜で俺のベスパを仕上げて朝から働き詰めなのだろう。

仕方が無いのでバイク弄りに詳しかった数人の後輩に連絡を入れておいた。

そこに妹の望が現れた。

「うひょー、凄いな。情報を流して一夜でこれか」

「はあ？ 望が仕組んだのか？ やっぱり」

「木を隠すなら森に人を隠すなら人ごみにでしょ。この辺はバイク屋も多いしそれに付随する店も沢山あるからね」

「まるでバイクの秋葉みたいだな」

「秋葉って言うよりミク場よね」

呆れて何も言いたくなかったが望の判断は間違っていないのだろう。

何か有れば親衛隊の目が光り、ミクとこの界限を出歩いても不審に思われないしな。

唯一の誤算はこのお祭り騒ぎが大きくなりすぎて色々なメディアで取り上げられてしまった事だった。

イエヴァン・ボルカ

ミクが俺の前にパソコンの中から突然現れて一ヶ月が過ぎようとしていた。

そして俺が住んでいるマンション界隈も一変してしまっている。

それは関東最古の大社じゃないか、なんて説のある由緒ある神社がアニメのモデルになっただけで、聖地巡礼と称したファンが訪れマスコミの取材もあり初詣の参拝者が急激に増え。

町おこしとしてアニメキャラの神輿や商品開発をして萌えおこしながら言われ経済効果は計り知れないらしい。

俺の住んでいる所に話を戻そう。

この界限にも一目ミクを見ようとファンが一時殺到したが今は落ち着いている。

理由はネットで真しやかに噂が流された事と親衛隊の力による所が大きい。

噂の方は尾ひれが付いてドンドン話が大きくなっていった。

「ミクの側には族上がりの怖い男がいつも一緒にいる」

「親衛隊の隊長は暴走族を一人で潰した」

など色々だが中には真実じゃないかと思えることが織り込まれた噂なども出回っていた。

その噂の陰には望の姿が見え隠れしているようで。

それは何故かと言うと望は嘘を付く時は隠したい本当の事を織り交ぜて嘘を付くのが一番ばれなくて信用させる事が出来るなどと平然と言ったのけたからだった。

そして親衛隊は常時交代で見回りをしていて、お陰で治安が良くなったなんて自治体からの声も有るくらいに統率されていてヲタクのイメージアップに一役買っている。

そんな親衛隊を見事に統率しているのがあの俺に負けた4人だった。今では親衛隊長が何もしない所為か四天王なんて呼ばれているらし

い。

そして一番変わったのは副隊長に任命されてしまったハルのバイク屋周辺だろう。

ハルのバイク屋には連日のようにチューンの相談やキャラのカッティングシートのおオーダーが入り盛況を極め後輩を雇い、目の回るような忙しさの様だ。

そしてそれに連なり周りのバイク屋や関係ショップでも痛單車やパーツを扱うようになり、まるで本当に痛單車や痛車の秋葉になってしまっていた。

俺はと言うと特に何も変わりなくミクとの2人＋監視員の暮らしを楽しんで……

「楽しいか？　そうか朔は楽しんでるんだね。彼女は可愛いもんね、何も知らない女の子を調教するのはそんなに楽しいの？」

「好きなように言っておけ、俺は俺の生活をしているだけだし。俺よりも楽しそうにしている望に言われたくない」

俺の言葉どおりだった望はまるで妹が出来たかのように、毎日洋服をとつかえひつかえ着せて世話を焼いているというより楽しんでいる。

それにミク1人増えた分の家事は全て望がしているのだから、俺が何かを言えた義理じゃないのが実情だった。

「そう思っているのなら買い物にでも行って来てくれない？　スー

パーが特売なの、買って来る物はメモに書いてあるから」

「判ったよ、バイクでひとつ走り行ってくるか」

「彼女と一緒に散歩がてら行ってきたら？」

「まあ、それもたまには良いか」

今日のミクの姿は白黒のギンガムチェックのAラインのシャツワンピースにカーキ色のミリタリーコートを着て黒いショートブーツを履いていた。

俺の格好は言わずと知れた普段着だけど秋というか冬間近なのでモ

ノトーンの服が多くなっていた。

マンションから歩いて10分程にあるスーパーは週末の午後とあって家族連れで賑わっている。

メモに書かれた物をカートに入れながら店内をミクと2人で歩いているとかなり目立っていた。

それはまるで美女と野獣というかヲタク野郎と美少女キャラと言えは良いのだろう。

ヲタクが連れて歩く初音ミクはかなり痛い世界で一般的には嫌悪されるべく物なのだろうが、既にこの界限では普通に認知され始めていて。

ミクが現れる前から近所では俺と望は井戸端会議の話題に度々上がっていた。

出来た双子の妹と出廻らしの駄目兄貴という構図で、そして今はその出廻らし駄目兄貴が美少女を引き連れて買い物に來ている。

俺と望、そして今はミクが住んでいる都内のマンションは都心であり、近所づきあいには殆どないが挨拶だけはきちんとしている為に一応礼節は弁えている兄弟という事で通っている。

これは昔からヤンチャをしてきた俺に対して、忙しい親の代わりに恥ずかしながら妹の望が口うるさく躰けてくれた賜物だった。

それでもマンションから少し離れれば俺達の事なんて知らない人ばかりで、特に子どもはミクに興味津津なのは仕方がないことなのだろう。

スーパーでメモに書かれた物を一通りカートに入れて店内を見て回っている则可愛らしい男のこと女の子が近づいてきた。
良く見ると兄妹のようだ。

そして手には何故か長ネギが……

「あらつつあつつあーあ　りびだびりんらば

りっぱんでいんらん　でんらんど

らば　りっぱった　ぱりっぱりっ

ばりびりびりびりすってん でんらんど

やば りんらん すてんらん でいあるー

わらば るぶるぶるぶるぶ どういえぶー

わっでい(づ)だ りんらん すでんらん どばだか

だかだが どうどう でいあど」

ミクが嬉しそうにネギを受け取り、ネギを振り回しながら歌い始めてしまう。

その姿は噂どおりの『はちゅねミク』の姿そのものだった。

そのミクの姿を見た兄妹はミクの周りを嬉しそうにはしゃぎ回っている。

「わーい、ネギ踊りだ」

「アホの子みたい」

あまりに不憫でミクからネギを取ろうとするが本当に何かのスイッチが入り壊れてしまったかの様に決してネギを離そうとせず到最后まで歌いきってしまった。

ロイツマのフィンランド民謡のイエヴァン・ポルツカの歌詞を口ずさむと兄妹が俺の顔を驚いた様に見て一言呟いた。

「フタク」

誰に言われようが俺はカミングアウトしているのでいっこうに構わない、ミクも歌い終わると何もなかったように元に戻ったので特に気にも留めず清算を済ませてスーパーを後にした。

店を出て少しするとミクが疲れ切った表情になりしやがみ込んでお腹の辺りを腕で押えている。

どうやらネギ踊り&イエヴァン・ポルツカは自分でもどうする事が出来ずにかかなりの体力を消耗してしまいうらしい。

仕方なく携帯をとりだして曲を流そうとして躊躇った。

何故かミクは同じ曲を好んで聞かなかった、まあ曲や歌がミクの食べ物だとすれば人間だって毎日は同じ物を食べたくないはずだから。しかし、連れて帰らなければ今は聞かせる歌も曲もなくおんぶして連れて帰るしかなさそうだ、望に連絡をすれば飛んでくるだろうが

家事一切を任せきりの状態でこれ以上望の手を煩わせるのが嫌だった。

麦畑

ミクをおぶさりマイバックを持って帰り道を歩いていると子どもの頃を思い出していた。

小さい頃、お袋におんぶされながら家に帰った記憶があり、お袋が歌を口ずさんでいたのを思い出した。

たしかスタンダードなジャズナンバーで『私を月に連れて行って』と言う歌だったと思う。

気付くと知らない間に口ずさんでいた。

するとミクの腕に力が入り俺にしがみ付いてきた。

「朔ノ歌 モット キキタイ」

「ん？ ゴメンな。俺は人前で歌を歌えないんだよ」

「朔ノ歌 スキ。朔 サミシイ？ 朔ノ歌 オシエテ」

ミクが俺の言葉から何かを感じ取った様だった。

トラウマとも言ふべき事があり、俺は歌を歌えなくなっていた。

そんな俺の前に歌を命の糧にする初音ミクが現れ、神様は悪戯好きにも程があると言うか酷な事をしてくれるものだと思った。

でも、ミクには関係ない事だ。

こいつは俺の歌を好きだと言ってくれる、ミクになら聴かせても……もし歌えなかったら……

心が揺れる。

それでも遊びながらならと思い、今度は親父が良く口ずさんでいたスコットランド民謡の『ライ麦畑で出会う時』を歌ってみた。

確か、コメディーグループが歌っていた曲だと親父から聞いたことがあった。

ミクをおぶったまま、子どもの頃のようにけんけんぱをしながら歌って遊んでみる。

「朔 タノシイネ」

「そうか、楽しいな。ミクが楽しいならそれで良いさ」

「朔 モウ イチド」

「よし」

同じフレーズを繰り返す。親父はこのフレーズしか歌った事がない。不思議に思い大きくなってから調べた事があるが日本では全く違う教育的な唱歌とされていた、原曲の歌はかなりオープンな男女の事を歌った春歌でこの『誰かさんと誰かさん』という歌詞が一番原曲に近い雰囲気になっていた。

すると不意に聞き覚えのある声がした。

「で、誰と麦畑に行くんだ？ その子か？」

「ミクはそんなんじゃない……き、京橋さん。お久しぶりです」

歌を聴いて元気になったミクを降ろして後ろを向くと、すらっとした長身でスーツ姿の見覚えのある笑顔が俺を見ている。

「朔が中々顔を出さないから痺れを切らして会いに来たんだ」

「すいません、俺なんかの為にわざわざ」

「相変わらずだな、その子が今話題急騰中のミクちゃんかな？」

「まあ、そうですね。ミク、そんなに隠れなくても平気だよ。この人は俺の先輩の京橋さんだよ、とっても優しい人だからね」

俺が説明しても、ミクは口を噤んで俺の後ろに隠れて俺のブルゾンを掴んでいた。

「嫌われちゃったかな？」

「そんな事は無いと思いますよ。今日はどうしたんですか？」

「言っただろ、痺れを切らしてって」

「すいませんがその話は」

「あはは、言うと思ったよ。今日は実は彼女に会いに来たんだ」

「はあ？ ミクにですか？」

「そう」

少しだけ緊張が走る、京橋さんは俺の先輩にして師匠みたいな人で。今もだけど昔から凄く良くしてくれて、俺が『ムーンライトダンス』で荒れて居た時に救い出してくれた人だ。

昔からインディーズバンドの間じゃ有名な人で引く手数多の超が付くくらいのベースリストで、今は若手ながら音楽プロダクションを立ち上げてインディーズを発掘して世に送り出している。

そして京橋さんの妹は……

その音楽プロダクションの代表がミクを訪ねてきたのだ、いくら世話になった人とは言え表情が硬くなつていくのが判った。

「そんな怖い顔をするなよ。今日は忠告に來ただけだよ、日本橋が動き回っているから気をつけろ」

「日本橋さんですか？ それは困った話かもですね」

日本橋さんと言うのは京橋さんとプロダクションを共同で立ち上げた人で、軌道に乗りかかった時にかなり際どい事をしていて京橋さんと衝突して別の新生プロダクションに移った人だった。

「相変わらず、汚い事でも何でもしている奴だからな。そんな日本橋がミクちゃんの事を嗅ぎ回っている。恐らくどんな手を使ってでも所属させる気だろう」

「宣伝費なんて殆ど要らないしあつという間にトップスターになれちゃいますもんね」

「朔はそんな事させないだろうけどな」

もちろんそんな気はなかった。

しかしミクは基本的に誰のものでも無い訳で、ただ俺と契約してしまつたから側に居るだけで。

そんな事を考えていると息を切らしながら走ってくる2人の姿が見えた。

「お京。置いてきぼりなんて酷いよ」

「あのな、湊が方向音痴だからこんな事になるんだろ」

「でも、見つけたじゃんって、超可愛いじゃん！」

「こりゃ、朔が一目惚れするはずだ」

「あの、湊さんに涼さん。ミクはそんなんじゃ無いですよ」

背が少し低く見た感じ女の子に見えなくもない湊 みなとついで 剛士さんはドラマーで、ビジュアル系の髪が長く背が高い人が八重洲 やえすりよしづみ 涼、この人

はキーボーディストでシンセサイザーにも精通していて今もこの2人は音楽業界で京橋さんには敵わないけれど、かなり人気があり今はフリーで活動している。

そしてこの3人は少し前までインディーズバンドとして活動していて、今でも語り草になるほど一時期を一世風靡した事があった。

「今日はどうしたんですか？ 錚々たるメンバーで」

「あんな、朔。お前にそんな事を言われたくないなあ。朔の顔を見に来たんだ」

「朔ちゃんは中々会いに来てくれないもんね、涼」

「そうだな、湊の言うとおりだ」

「俺はおまけでミクを見に来たんでしょ」

「あはは、当り！」

この人達だけはしばらく会っていないなかったけれど距離なんか感じさせないでくれる。

確か2年くらい会っていないはずなんだ。

それでも俺にとっては長い2年だった。

突然、湊さんが曲を口ずさみ始めた。

それに合わせて京橋さんと涼さんがハモっていく、するとミクの瞳が輝き出し歌い始めた。

その曲はインディーズ時代に歌われていたバラードで『Fortune Love』という曲だった。

住宅街の道端でミクとイケメン3人が綺麗なハーモニーを奏でている、しばらくすると京橋さん、湊さんに涼さんまでが俺に目で合図を送ってくるが歌う事なんて出来ずに心の奥がちくりとする。

そんな俺の顔を見た湊さんが曲を変えてきた。

「あ、1・2、1・2・3」

すると始めに歌いだしたのはなんとミクだった。

皆が驚いた顔をしてミクに合わせて歌い始める。

アップテンポなバンド名にもなっていた『Loop』と言う曲だった。

なっていたなんて言うのと怒られてしまいかもしれない、活動休止中という事になっているはずだ。

ボーカルが歌を歌えなくなり、已む無く休止と言う事になってしまつて、休止に追い込んでしまった歌の歌えないボーカルが俺だった。楽しそうに歌っているミクを見ていると少し前までの俺の姿とダブった。

「もう、2年だぞ」

「京橋さん、俺にしたらまだ2年ですよ」

「でも、何でミクちゃん俺たちの歌を知っているんだ？」

「そうだな、朔が教えたんじゃないのか？」

湊さんと涼さんが矢継ぎ早に不思議そうな顔をして聞いてきた。

「初めてミクが現れた時にちよつとトラブルが起きて」

「ああ、それつてマジミクが街に現れたつてネットで検索エンジンがパンク寸前になつたつて」

「まあ、そうですね。あの時、俺が怪我をして病院にミクを連れて行くわけにも行かずにハルに預けた時にハルがCDを聞かせたらしいから」

「ハルつてあの？」

「あはは、今は真面目なバイク屋の跡取りですよ」

涼さんが少しだけ顔を顰めた。

まあ、あの頃のハルと俺はかなりのDQNだったから涼さんの反応も仕方がないことなのだろう。

そんな事を話しているとミクが不安そうな顔をして俺の顔を見上げていた。

「朔 歌キライ？ ワタシの 歌キライ？」

「嫌いじゃないよ、ミク」

「キライ ジャ ナイ？」

「好きだよ、ミクの歌」

「スキ ウレシイ ワタシ 朔 スキ」

曖昧な日本語表現はミクにはまだ難しいのか通じないのだろう、日

本語を普段使い慣れている俺達ですら時に勘違いし誤解が生まれたりする事があるのだから。

すると、ミクが嬉しそうに俺の首に腕を回すようにして抱きついてきた。『ワタシも 朔 スキ』って俺はミクの歌が好きだと言ったつもりなのだが……

ミクにしてみれば歌が全てで歌〃俺と言う事になるのかもしれない。そんな事を考えていると3人が嬉しそうに微笑んだりにやけながら俺とミクを見ていた。

「へえ」 ミクちゃんは朔ラブか」

「朔もまんざらじゃなさそうだし」

「まあ。時間だけが解決してくれるだろう」

湊さんと涼さんの言葉は聞き流せたが京橋さんの言葉が突き刺さった。

「京橋さん……」

「朔、良いか彼女の前で絶対にそんな顔をするな。彼女にはお前しか居ないんじゃないのか？ そうだろう。忘れるとは言わない忘れる訳はないだろうからな。でもいつまでも立ち止まっている事は出来ないんだ。それにあいつだって決してそんな事を望んでいないはずだ」

「すいませんでした」

「時間だけがそして彼女が鍵なのかもな」

京橋さんが優しい眼差しでミクを見ている、俺は少し戸惑いながら口を開こうとして俺の携帯から着ウタが鳴り響いて慌てて通話ボタンを押す。

「くおら！ 朔。何処で道草してるんだ？ 今日晩飯抜きだからな」

「悪い、ちよつと」

「問答無用！」

耳を劈くような望の怒鳴り声が携帯を耳に当てずに持っているだけで聞こえてきた。

すると京橋さんが俺の携帯を取って望と話し始めた。

「お久しぶり、望ちゃん。元気だった？」

「ふえい！　ら、蘭さん？　ええ！　な、なんで、ら、蘭さんがさ、朔の携帯に？」

蘭は京橋さんの下の名前だった。

今はそんな事はどうでも良く俺のそれほど広くもなくかといって狭くもないワンルームマンションに居る。

それも京橋さんと湊さんや涼さんも一緒だ。

あれから望が落ち着きを取り戻し近くに来ているなら是非とマンションに招待したのだが、何故か招待した望自身の部屋ではなく俺のヲタク塗れな部屋だった。

玄関に入ると直ぐにそれほど広くないキッチンと反対側には風呂とトイレがあり奥に部屋がある。

部屋には備え付けのクローゼットがあつて右手の壁には天井まであるガラス張りの薄型ラックがあり、中にはガンブラとフィギュアがびっしりと並べられていてその横にベッドがある。

ベッドの反対側にはローラックとパソコンデスクが置かれていた。望の部屋も同じ間取りのはずなのに何処にミクにやったあれだけの洋服があつたのだろう。

それに望が部屋に京橋さん達を招待しなかったのは、それなりの訳がありその事に触れると命がいくらあつても足りないので止めておこう。

「うひょ、凄い部屋だな相変わらず」

「そうだな、ここで2人で暮らしてるんだ」

「いつまでかくれんぼをしているのかなこのお月様は」

三人三様の感じたまんまの言葉が返ってきた。

「湊さん、もともとヲタクですから。涼さん、隣には地獄の番人ケルベロスが居るんですよ。それに京橋さん俺は別に隠れているつもりはないですよ。ただ」

「そうだな、まあ時期が来れば顔を出すだろうよ。少しずつ月が移ろい変わる様にな。お前の名前は始まりだからな」

俺と妹の名前は月の別名から付けられている。

朔は新月の事をそして望は満月の事を、そして性格もそのまま明るい満月のような望に真つ暗な闇夜が俺だった。

皆が寛ぎ始めた所に望がお茶を運んできた。

「もう、朔は京橋さん達が来ているならそう言えば良いのに」

「望ちゃん、俺達が急に押し掛けて来たのだから」

「き、京橋さんならいつでも構わないですよ」

「なあ、朔？俺らってお邪魔虫なの？」

「そつみたいで……」

湊さんの突っ込みに同意しようとした瞬間、頭の中に望の言葉が響いた。

『後で覚悟しなさい』望はエスパーだったのか？背筋に冷たいものがはしる。

「湊さん。そ、そんな事はないですよ。ただ、望が京橋さんラブなだけで」

「そうだったね。昔からお京の大ファンだもんね」

「今でも部屋に写真やポスターが貼ってあつたりして」

「いくらなんでもそれはないですよ。涼さん、望も21ですよ」

言ってしまった後の祭りだと気付いてフォローを入れたが、双子の俺にしか感じない殺気が俺に突き刺さり、覚悟なんて言葉が吹き飛んだ。

しばらくして、遅くなるといけないからと京橋さん達が立ち上がった。

「また、来て下さいね」

「そうだ、望ちゃん。今度の日曜日は何か用事でもある？」

「え？ええと次の日曜日は、特に」

「それじゃ、迎えに来るか」

「えっ？」

望が素つ頓狂な声を上げると、それ以上何も言わずに3人がそれぞれ俺とミクに手を振って部屋を出て行って帰ってしまった。

ミクは始終ベッドの上でニコニコしていた。

それは俺の歌が少しでも聴けたからかもしれないし、俺がミクの歌を好きだと言ったのかもしれないが本人のみが知ることだった。

香織

次の日曜日、マンションの下で望とミクの3人で待っていると……

「な、何故にその格好？」

「い、良いじゃない。わ、私だって時々は女の子らしい格好もいかなかった」

「判りやすい奴だな」

望はカーキ色のハイネックのカットソーを着てその上にブラウン系の小花柄のふんわりとしたシフォンワンピースを重ね着して、ダークブラウンとブラウンの2色使いのブーツを履いていた。

ファンクラブの奴等が見れば狂句乱舞して大騒ぎになるであろう望がフェミニンな格好をしている。

ミクはと言うと相変わらずのフェミニンな格好でAラインのベージュユ&グレイージュのニットワンピースを着て温かそうなスエードブーツを履いている。

ワンピースの柄は今流行のノルディック柄と言うらしい、そしてざっくりと編まれた軽めのポンチョを羽織っていた。

俺の格好は言うまでも無いだろうダークな感じとだけ言っておこう。しばらく待っていると指定された時間通りに大きな白いワゴンが目の前に止まった。

「おはようございます」

「おお、今日は一段と可愛いね。望ちゃんもミクちゃんもそれに引き換えこの男は何でかな」

「俺は引き立て役で良いんですよ、湊さん」

「本当に？ あの朔なの？」

「あの……涼さんは俺の本当の姿を知らない訳じゃないですよね」

「ええ、これが朔の本当の姿なの？ まあ、冗談はこの辺で。さあ、乗った乗った」

大きなワゴンは8人乗りで、運転席に京橋さんがその後ろに湊さん

と涼さんが乗っている。

ミクを後部座席に乘せて俺も乗り込んでドアを閉めようとする。

「朔、私は？」

「はあ？ 普通2・2・2で乗ったほうが広いだろ」

「へえ、えっ？」

「望は助手席に乗れ」

それだけ言っただけでドアを閉めると望が柄にもなく？ モジモジしている。

するとムードメーカーの湊さんが窓を開けて望に一言呟いた。

「望ちゃん、乗らないと置いていくよ」

「い、嫌です。私が居ないと朔は何も出来ないんだから」

「うわ、相変わらずのお姉ちゃん目線！」

「ふん！」

湊さんにまんまと背中を押されて渋々顔で望が京橋さんの横に乗りシートベルトを締めていると、京橋さんが静かにワゴンをだした。

首都高6号線に乗り三郷に向かいそこから常盤自動車道に乗り換える。

「こうして皆でどこかに行くのは久しぶりだな」

「そうだな」

なんだかしんみりしてしまう。

それはこれから向うところがそう言う場所だから仕方が無いのかも
しれない。

そんな、感情を読み取ったのかミクが何処となく寂しそうな表情で
俺に話しかけてきた。

「朔 ドコニ イクノ？」

「お墓参りだよ」

「オハカマエリ？」

「ミクにはまだ難しいかな」

「……………」

それっきりミクは黙り込んでしまった。

「そうか、もう直ぐ香織ちゃんの三回忌だね。それなのになんたかこんな格好で……」

「あはは、望ちゃん。気にする事はないよ、むしろその方があいつも喜ぶよ。あいつのお願いの1つだからね。法要とかは一切しないで近くに來たら遊びに來てつて。それに今日のメインは別だから」

「えっ？ 京橋さん。香織ちゃんに会いに行くのがメインじゃ」

「だから、近くに來たから顔を見に行くだけだよ」

京橋さんの妹の香織ちゃんのお墓は海が見渡せる高台にあった。

いつも綺麗にされているお墓に花と香織ちゃんの好きだったお菓子を備えて線香を焚いて手を合わす。

ミクも見様見真似で手を合わせて目を閉じていた。

「朔 誰ナノ カオルちゃん？」

「香織だよ。京橋さんの妹で……」

「朔、お前らしいと言えはお前らしいか。何も話してないんだな」

「俺が口に出来るような事は何もないですよ」

するといつもおちゃらけている湊さんが少し真面目な顔になってミクに話しかけた。

「ミクちゃんに何て言えば通じるか判らないけれど聞いておいて貰いたいんだ。ここで眠っている香織ちゃんは朔の恋人だったんだよ、病気で死んでしまったけど。だからこれからは朔の側にミクちゃんが居てあげて欲しいんだ。お願いだよ」

「朔ノ コイビト 朔ノ スキナヒト？」

「今はミクちゃんラブだけどな」

「勘弁してくださいよ、何もこんなところで」

涼さんと港さんの言葉に胸が締め付けられる。

するとミクの頬に一筋光るものが落ちた。

それを見て大きく深呼吸をしながらミクを優しく抱きしめてしまった。

「ミク、ゴメンな。ミクが泣く事はないんだよ」

「朔 カナシイ ミク モ カナシイ」

「そうだな、もう大丈夫だから」

「ウン」

そして何故だかワクワクした子どもの様な大人3人と怖い顔をした望の視線が突き刺さった。

望の視線は仕方がないのだろう。

香織ちゃんとは親友だったのだからその親友の目の前で俺がミクを抱きしめているのだから。

「こんなところで何をしているんだ？ 朔。罰として問答無用で付き合えよ」

「…… な、何をですか？ あっ！ 嵌めたでしょ俺の事を」
完全に湊さんや涼さんそして京橋さんの目まで笑っている。

「相変わらずニブチンだな朔は、ここに来る事は判っていたんだろ」

「まあ、忘れるはずがないじゃないですか京橋さん。仕方が無いかとコトン今日は付き合いますよ」

「それじゃ、望ちゃんも良いよね。そんな怖い顔していると京に嫌われちゃうよ」

「な、何を言っているんですか八重洲さんは。わ、私は別に」

「あはは、だつて顔に書いてあるよ」

「もう好きにして下さい」

「よっしゃ、レッゴー」

湊さんが片手を抜けるような青空に突き上げる。

涼さんにからかわれた望は真っ赤に色づいた林檎の様に赤くなり。

ミクはいつの間にか笑顔になっていた。

スパ・リゾート 1

「……ここって……す、スパリゾート？」

「ビンゴ！今日はここのウォーターパークやスパで1日遊ぶんだよ」

「それじゃ湊さん今日のメインって」

「そう朔は勘が良いんだか悪いんだか。久しぶりに皆で遊びに行こうって京が計画したんだ。休みを調節するのに一苦労だったけどね」そこはホテルと5つのスパやプールのテーマパークの集合体の大きな大きなスパリゾートだった。

昔はハワイアンセンターだったが今はハワイアンズに変わっていた。

「でも何も持つて来てないですよ。京橋さん」

「買えば良いだろ、それくらいなら俺が」

「そうじゃなくって、まあ二言はないですから良いですよ。俺だってそれなりに稼いでいますから心配しないで下さい」

ミクは目をキラキラさせてキョロキョロしている。

周りのお客から何かを感じているのだろう、ここは楽しく遊ぶ場所なのだからお客の顔からも笑顔がこぼれ話し声も楽しそうだから。そして望はと言うと……

「み、水着姿を晒すなんてありえない。朔、私は行かないからね」

「あのな、涼さんに『好きにして下さい』って言い放ったのは誰だっけ？」

「だ、だってこの時期に水着にならないといけないんだよ」

「それじゃ、あんなに瞳を輝かせてるミクをどうするんだよ、望が行かなければミクも行けないって事だぞ」

「着替えぐらいならさせて上げるわよ。良いわよね、朔は彼女の水着姿を見れば」

完全に拗ねきっているこんな時の望は思いつきり弄るに限る。それは子どもの頃から直ぐに拗ねる望への対処法だった。

「まあ、無駄毛だらけじゃ。水着になんて恥ずかしくってなれないわな。ましてや京橋さんに見られた日にや興ざめだし……」

「だ、誰が無駄毛だらけだ！ 女を舐めるな！ 抜かりは無いわ！」
望が叫びながらソニックブームが聞こえそうな音速のラリアートを繰り出す、言わなくても良い事を言ってしまうほど冷静さを欠いた望が繰り出す技なんてかわすのは簡単この上ない事だった。

お陰で飛び切りの水着を買うからと俺の財布の中は軽くなったが、望の服を売った手間賃が入って来ていたのでそれはそれで良しとした。

ミクも楽しそうだしミクの水着姿を見たくないと言えば嘘になる、それは健全な青少年の証だろう。ただロリ扱いされるのがたまに傷だったりする。

フロントで入場料をと思っていると京橋さんにリストバンドを渡された。

フリーパスと同じ様な物でこれをつけていれば殆どの施設が利用できるとの事だった。

なんでも京橋さんの事務所関係で時々利用させてもらってスパリゾートとは懇意にさせてもらっているからとの事だった。

男4人で着替えを済ませてウォーターパークの入り口で待っている。男の着替えなんて簡単そのものだからだ。

しかし、問題はそこじゃなく水着姿でも目立ちすぎるくらい目立っている。

行きかう女の子の視線が凄い。

ビジュアル系の身長177センチの涼さんに、良い感じに鍛え地黒だという湊さんは4人の中で一番身長が低かったがそれでも172センチ。

そして何を着ても様になってしまう京橋さんは180センチの長身で、そこに182センチの長身のボサボサ頭のヲタクの俺が猫背姿で混じっている。

いつものメガネはスパと言う事でロッカーに置いてきた。

普段は掛けているけど無くても支障がない程度なので伊達メガネと言ったほうが良いかもしれない。

着替えをしている望とミクを待っていると京橋さんが声を掛けてきた。

「なあ、朔。お前、今日はトコトン付き合いますって言い切ったよな」

「はい、言いましたけど」

「それじゃ、俺たちと居る時はしゃんとしている。これは命令だ良いな」

「でも……」

「はあ？ 言う事聞けない訳？」

「そうだ京の言うとおりだ」

「あはは、朔ちゃん。相変わらず皆には敵わないね」

涼さんと湊さんにも追い詰められる。

京橋さんは24歳、涼さんは23歳で湊さんはもう直ぐ23歳のはずだから今は22歳で俺が一番年下なので大概は言い負かされる、リーダーの京橋さんは一目置かれていたけれど涼さんや湊さんは年齢なんて関係なく接してくれたし俺もそう接していた。

まあ京橋さんの命令なら従うしかない。

やる気のない猫背を伸ばして髪の毛を後ろに流して一応スパと言う事で持つて来ていたゴムで1つに纏める。

「ヒュー、敵わないな。朔には」

「本当だ、俺と湊が霞むな」

「あの、からかうのは止めてくださいよ。俺は2人みたくイケてないですよ」

「それは謙遜じゃないと思うけど」

「嫌味だな、まあそんな朔だから人気があつたんだろ」

「一応、メンバーカルでしたからね。今は歌えないですけど」

そんな事を話していると望が壁の影から顔だけをだしてキョロキョ

口と俺達を探している。

そして京橋さんの姿を見つけると小動物の様に顔を引っ込めてしまった。

望が顔を出したと言う事はミクも近くに居るはずなのが簡単に想像できた、いつもやらればなしも癪に障るのでここは一発逆転を狙う。

「ミク！ おいで」

「ハイ」

俺に呼ばれてミクが満面の笑顔で望の手を引っ張りながら駆け寄ってきた。

ミクの水着姿は一言で言えばメチャキュートで、四天王に見せたら卒倒するだろうそれくらいインパクトがある。

可愛い水色のビキニのトップには白いレースがあしらわれていて、下は白いフリルのミニスカを穿いているスレンダーな体に良く似合っている。

そして恥ずかしそうに真っ赤になっている望の水着は淡いパープル系の大柄なペイズリー柄で、ビキニのミニスカかと思ったらキュロットパンツになっているらしい。

ミスキャンパスとミクの水着姿は俺たち以上に場の雰囲気を変えた、周りの全ての男の視線を集めている。

流石と言っべきなのだろうか、するとミクが声をかけてきた。

「朔 ドウ？」

「ふえ？」

ミクが俺の腕に体を密着させて上目遣いで聞いてくる。

思わず間の抜けた返事をしてしまう、それもそのはずでミクの胸が俺の腕に……それも直に肌の柔らかさを感じる。

普段は服を着ているのであまり気にしなかったが、本当に女の子なんだと言っのを実感？ してしまった。

「か、可愛いぞ、とっても」

「朔 スキ？」

「す、好き？ 好きだよ。ってあれ？」

ミクの顔が見る見る光り輝いて見え更に体を密着させてきた。

してやったりと望の口元が僅かに上がり、望の陰謀に気付くが望は畳み掛けるように心理的攻撃の手を緩めなかった。

「朔、どう？ 彼女の触り心地は？」

「あのかな……」

返答に戸惑うと望の心理的攻撃に加え周りの男達の視線が突き刺さる、あまりにも痛すぎるが今はヲタクのヲサクでは無くイケメンにイケていると言われた朔だ。

「温かくって柔らかいし。それに」

「それに、何よ。早く答えなさい」

「可愛いぞ、嫌いじゃない」

「ヒィヤァ……ン」

人差し指で軽くミクの胸をツンと突つつくとミクがなんともあられもない声をあげて胸を両手で隠した。

その声は室内プールと言う事もあってエコーが掛かるように反響する。

望の顔が一瞬引き攣るがそれより早く周りの男達が前屈みになってコソコソとプールに入ったり更衣室に逃げ込んだ。

ミクのあの声は効果てきめんだった。

「さ、朔。あんたって子は何て事を」

「朔！ キライ ジャナイ？ 朔！ スキ！」

メチャクチャ喜びながらミクが俺の首に腕を回して抱きついてくる、ミクも頭の回転は良いほうみたいだった。

「今回は朔の勝ちみたいだな。朔、頑張れよ」

「えっ？ 何で俺なんですか？ 湊さん」

「俺は、俺だけのお姫様を探す旅に出るから、お昼にな。チャオ！」
片手を上げると湊さんは女の子探しへ走り去ってしまった。相変わらずナンパと言うか……

「それじゃ、俺は温泉にでも行ってくるから。後は御二人さん宜し

くな」

「へえ？ 涼さんはどこに？」

「朔、温泉につて言っているだろう。昼に落ち合おう」

そう言いきると涼さんもすたすたと世界最大の露天風呂がうたい文句のスパリゾートの中では異色の江戸の湯屋をイメージした温泉に行ってしまった。

涼さんは見かけのビジュアル系とはかけ離れたアンティークと言うより骨董や古美術が大好きで、家には古い階段箆笥があり純和風それも古い物が大好きな古式ゆかしい人なのだ。

「しょうがない奴等だな、相変わらず」

「まあ、気を使っているつもりなんですよ」

「さ、朔はなんて事を言うの？ み、皆で楽しまないと」

思わず吹き出しそうになる。ちよつと前まで激怒モードだったのに急に大人しくなって、普段は妹なのに上から目線で姉の様な望が形無しで言っちゃなんだが壊れかけている望を見ているのが楽しかった。

「それじゃ、望は京橋さんとじゃ嫌だと？」

「バ、馬鹿。き、京橋さんが嫌な訳ないじゃない。むしろ嬉しいと言うか、その……朔の馬鹿」

間欠泉から水蒸気が噴出すように望の顔が真っ赤になって茹蛸のように湯気を頭から吹き上げていた。

恐らくしばらくはフリーズしてしまって使い物にならないだろう。

俺は京橋さんに声を掛けて頭を下げミクの手を引っ張って歩き出した。

「京橋さん、望の事しばらくお願いします」

「判ったよ、行って来い」

ミクはキョトンとしていたが構わずに歩き続ける。

後ろを振り返ると真っ赤な望が京橋さんに何かを言われてブンブんと音がするくらい頭を縦に振っている。

そんな望を優しくエスコートしてフードコーナーにでも連れて行くつもりなのだろう。

それだけを確認してミクに話しかけた。

「ミク、何で遊びたい？」

「アソブ？」

「そう、楽しいぞ」

「朔とアソブ。アレがイイ！」

ミクが指差したのは楽しそうな悲鳴が聞こえるウォータースライダーだった。

プールが初めてなミクに少し戸惑ったが風呂は普通にな？ 望が教えたとおりに入っているようなので大丈夫なのだろう。

2人乗りの浮き輪に乗って真っ暗なチューブの中を滑り降りる。暗闇の中を時速40?で滑り降りていく、視界が遮られてどちらに曲がるのかも判らずに左右に浮き輪が揺れてかなりスリルが楽しめる。

途中一箇所だけチューブの屋根がなくまるでウォーターパークにダイブするような感覚だった。

大きなプールに流れ出ると一気にスロースタウンする。

ミクの顔を覗き込むと怖かったのか涙をポロポロと零していた。

「ミク、ゴメンな。怖かったのか？」

「クライの コワイよ」

「クライの？」

「マツクラが イヤ」

「暗いのが苦手なのか？」

「ウン クライのヒトリボッチ イヤ」

どうもスピードが怖いのではなく真っ暗なのが怖かったらしい。

恐らく俺の前に現れるまでは暗い世界に独りぼっちだったのかもしれない。

他の長さの違う3種類のウォータースライダーにはご満悦で、それぞれ2回ずつ計6回も滑り降りる羽目になってしまった。

そして人が多くそれだけ言葉が怒涛のように流れ込んでくる。

ミクのボキャブラリーも飛躍的にアップしてきているのを感じた。

「朔、モウイチド。ハヤク」

「ミク、また並ぶんだぞ」

「タノシイから ダイジョウブ」

そこで時間を確認するとちょうどお昼前になっている。

確か涼さんも湊さんもお昼には戻ってくるはずだ。

前もって4人で逸れた時はシアターの前にと話してあったとおりにシアターに向かう事にする。

「ミク、皆と集まる時間だからな」

「ウン、アトデね」

「後からな」

シアター前に行くのと京橋さんと望の姿しか見当たらなかった。

望は落ち着きを取り戻して京橋さんと普通に話している様に見える。

「他の2人はまだですか？」

「まだ、みたいだな。気でも利かせたか」

「それは無いと思いますよ。湊さんは女の子とどこかではしゃいでそうだし、涼さんは湯屋でまったりと癒されているんじゃないですか？」

「で、朔はミクちゃんとか？」

「ウオータースライダー三昧でした。ミクが何度も滑るって聞かなくって」

京橋さんとそんな話を話していると普段どおりになった望が突っ込んできた。

「朔が怖がる彼女を無理矢理滑らせて泣かせたところを優しく」

「アホだな、今時のアニメでもそんなベタはしないぞ。ミクに聞いてみる」

「ねえ、スライダー面白かったの？」

「ウン、マタアトデ 朔と イクノ」

「あら、本当みたい。それに」

「ここは人が多いからなボキャブラリーの洪水だなまるで」
すると京橋さんが不思議そうな顔をして俺に聞いてくる。

それは当たり前なのだろう京橋さん達はミクの事を殆ど何も知らないのだから。

知ってもらっておいで損は無いと思い軽く食事をしながら話をする事にした。

湊さんも涼さんも良い大人なのだから大丈夫だろうと言うことになった。

ミクとの出会いから今まで感じた事や判った事を一通り京橋さんに話すと少し自分の中で考えを纏めてから俺に質問し始めた。

「ミクちゃんのエネルギー源は音楽という事なんだな」

「そうですね、歌ですね。それも新鮮な生歌が一番良いみたいです」
「よ」

「まるで鮮魚が生鮮野菜みたいだな。で、契約は仮なのか？」

「そこははつきり覚えてないんです。出会いが半分夢の中だったんで」

「まあ、常に朔が側に居れば問題ないだろう。ただ、その時に」

「歌ですか？ 厳しいかもしれないけれど何とかしないと」

「そうだな、朔なら何とかしてくれるよな」

「……それは」

「気にしすぎだ。言った筈だぞ、忘れるなとは言わないと。あいつだつてそんな事は望んでいないはずだ」

「そうですね」

話が昔のことに向かい出し、なんだか気まずい雰囲気になってきた。昔の話をしている時に望は何かを言ってくる事は今まで一度もなかった。

これからもこの話には入ってくる事はないのだろう。

「しかし、あいつらは本当に自己中だな」

「ちよつと見に行きますか？」

「そうだな」

京橋さんの方から話を終わらせた、気まずいのを感じたのだろう。
それにそんな感情に敏感なミクが直ぐ隣に居る訳だし、あの2人を
放っておく訳にも行かなかった。

スパ・リゾート 2

ミクと望をファーストフード店の前にあるテーブルで待たせて京橋さんと2人で探しにいく事にする。

京橋さんが温泉ゾーンの涼さんを、俺がこの広いプールの何処かに居る湊さんを探して回る。

しばらく見て回ると直ぐに湊さんは見つかった。

見つけたというより目立ち過ぎてドン引きしてしまった。

まるでハーレムアニメでも見ているんじゃないかと思うくらいだった。

周りに何人も女の子がいて全員の女の子が湊さんしか見えていない。思わず目の上に片手を当てて溜息を付いてしまう。

あまりにもリアルに想像通りだったからだ。

そして湊さんと目が合いそうになりその場を離れる、あんな状態の中に巻き込まれるのは真っ平御免だった。

後ろから名前を呼ばれたような気がするが完全に無視をして緊急離脱する。

自分でイケているかと言えば否なのだが、イケメンの涼さんや湊さんにイケてると言われれば否定の仕様が無いのかもしれないがだ。

そんな俺があの中に入れば……考えただけでもゾツとする。

見ず知らずの女の子にベタベタされるなんて鳥肌もんだ。

それにそんな所を望なんかに見られたら何をされるか判ったもんじやないのも理由の1つだった。

そんな理由でと思う奴は一度で良いからマジ切れの望スペシャルを受けてみると良い。

一般人なら即死だろう。人に言わせると俺は一般人じゃなく逸一般人らしい。

すると何処からか指笛の音が聞こえる。

音のする方を見ると京橋さんが指で戻れの合図を送っている、恐ら

く涼さんが寛ぎきっている所を見つけたのだろう。
一緒に居ない所を見るとあまりにも蕩け切っていて見捨ててきたの
だろう。

蕩けたビジュアル系なんて物好きじゃないと見ていられないからだ。
ミクと望が待っている席に近づくと2人の男がナンパをしているの
が見えた。

2人の男は見るからに軽そうでロン毛の茶髪と金髪のツンツンヘア
の男でダボダボの海パンを腰で履いている。

側まで近づくと男の声が聞こえてきた。

「ねえねえ、俺たちと遊ぼうよ。良いじゃん、良いじゃん。ね」

「うわあ、ミクじゃん。コスプレ？ それにこの髪の毛本物なの？」
望は完全に無視していてミクは訳が判らずじつとしているが、何も
言わない望をみて動いてはいけなさと感じたのかもしれない。

すると金髪の男がミクの髪の毛に手を伸ばすとミクの顔が強張って

……

「俺の連れに触んな」

「はあん？」

俺が金髪男の腕を掴むと、下から覗きこむように睨み付けてくる。
するとロン毛茶髪男が切れて殴りかかったきた。

「でっかい奴は隙だらけなんだよ」

「ほう、頭の悪い奴の方が隙だらけだと思うが？」

ロン毛茶髪男の振り上げた拳はどんなに振り下げようとしても京極
さんに腕を掴まれてびくともしなかった。

まあ、この程度の男2人なら望に掛ければ一溜りもないのだが、今
日は水着だから大人しくしていたいのか。

それとも京……

「朔、遅い！」

「わ、わりい」

望の一言で京に続く言葉を抹殺されてしまう。

そして反省という名の肅清が家に帰れば確実に下される事がたった今決定してしまった。

全てこの馬鹿男2人の所為なのだ、沸々と怒りがこみ上げて男の腕を掴んでいる手に無意識に力が入る。

ミクは少しだけ不安そうな顔をしたが俺が微笑み返すと安心したのか笑顔で返してきた。

「いててて、離せよ」

「朔、ここは公共のプールだからな」

「そうですね、スパリゾートなんだから楽しまないと。お兄さん達、そんなに遊びたいなら俺等と遊ぼうぜ」

「ふざけんな！」

金髪男の叫び声なんて気にせずに腕を掴み上げる。

京橋さんも俺と同じ様にロン毛茶髪男の腕を掴み上げている。

頭も軽そうだが中身も軽かった。

京橋さんと顔を見合わせて水深が130センチのただっ広いメインプールに男の腕を掴んだまま走り出し飛び込む。

そして……男を沈めてから京橋さんと一緒にプールから上がり望とミクの所に戻った。

「遅れてゴメンな、怖かったか？」

「コワクナイ 望ガ イッショ。朔ガ キテクレタ カラ」

ミクが首を大きく横に振ってそんな事を言ってくる、思わず萌えそうになってしまった。

「それで、お2人さんは何を持っているの？」

「これ？ 汚い海パンだな」

「もう、京橋さんまで。そんな物は捨ててよね」

「はいはい」

摘み上げて望の前に突き出した海パンをゴミ箱に投げ込んだ。

メインプールで何かをわめき散らしている男が2人いたが程なく監視員に連れ去られてしまった。

そんな騒ぎがありしばらくすると涼さんと湊さんの2人が合流して、一緒に行動する事になる。

豪華絢爛？ 百花繚乱？ と言えば良いのだろうか。

ここでは知る人も居ないだろうがインディーズではかなりメジャーな方で人気もあつた、そんなメンバーが勢ぞろいしヲタクにまで名を轟かせているミスクャンパスの望がいて注目を浴びるミクが居るのだ、目立つ事この上ないのは今更どうしようも無い事なのだろう。

ちょうど、シアターでショーが始まろうとしていた。

「やっぱ、最前列でしょ。ね、京橋さん」

「そうだね、ミクちゃんも居る事だしな」

そんな事を言いながら望がリストバンドを係員に見せるとすんなりと案内してくれた。

ハワイの歌やフラダンスで始まり前半はフラがメインで綺麗な踊り子さんが優雅なフラを見せてくれる。

そしてサモアの豪快なファイヤーナイフダンスがあり、ニュージーランドのマオリ族の踊りやタヒチのダイナミックなダンスが続きフラでフィナーレを迎える。

ミクは楽しそうに体でリズムを取ったり手でフラの踊りを真似したりしていた。

「ミク、満足か？」

「ウン、タノシイヨ イッパイ」

「いっぱい？ ああ、お腹がいっぱいって言う意味か」

ミクが細いお腹を擦るようにしている。

「そっか、良かったな」

「ウン！」

「それじゃ、ミクちゃんもお腹いっぱいになったみたいだし皆で遊びますか？」

「え？ 湊さん。引き連れていた女の子達は？」

「あの子達は結局、僕の外見しか見てないんだよね。下ネタなんか

を言つとドン引きしちゃつてさあ」

『さあ』つて相変わらず濃い下ネタ話でもしたんだろうな。

湊さんはそうやって女の子をはぐらかせているようだった。

どんな下ネタかは到底文字になんて出来ない言葉が多かつたの思ひ出した。

ショーを見た後はミクのリクエストで再びウォーターライダーに乗ったり流れるプールでゆつくりと遊び、スプリングパークに移動してのんびりする事になった。

スプリングパークは南欧風の室内スパになっていて2つの温泉浴槽があつて、温度も34と低めで長く浸かつていても疲れないらしい。

涼さんは直ぐにオンドルに入るなり横になって寝てしまい、望は京橋さんを誘いミストサウナに行つてしまった。

「ミク、こちらおいで」

「ウン？」

不思議そうな顔をするミクの後ろに周りツインテールの長い髪の毛をクルクルと巻き上げてお団子にする。

スパだけに長い髪の毛が気になったからだ。

「相変わらず、マメだね。朔ちゃんは」

「そんなじゃないですよ」

「しかし、ミクちゃんは可愛いな。俺もパソコンで見たことがあるけど実物は流石に違うよな」

「そうですか？ でもミクはパソコンから出てきたんだし」

「それは別の世界からなのかな、それとも未来から？」

「さあ、どうなんでしょうね。人間と同じ様な容姿はしているけれど」

「調べたわけじゃないからか。で、朔はどう思っているの？」

湊さんに言われて困つてしまう。

人間ではないのは確かなのだがそれは微々たる事だと俺は思つけれ

ど他の人から見ればどうなのだろうか。

それにこんな事を考えながら話をすれば不安な気持ちを直ぐにミクに見抜かれてしまうだろう。

「まあ、良いか。朔は朔だよ」

「湊さん……」

何かを感じたのか湊さんも笑顔で話を終わらせてくれた。

それから打たせ湯やジャグジーでまったりした。

京橋さんの集合の声で集まり楽しかったスパリゾートを後にする。

着替えを済ませて再び京橋さんが運転する大きなワゴンに乗り込む。涼さんと湊さんが先にミクを後部座席に乗せてくれた。

流石、紳士という感じで女の子の扱いに慣れている。

そして望が助手席に行こうとして腕を掴んで後部座席に連れ込んだ。

「な、なんで帰りは後ろなのよ」

「そんなにやいやい言うなよ。京橋さんに悪いからだ」

「はあ？ 意味わかんないよ」

そんなやり取りをしていると涼さんと湊さんも乗り込んで東京に向けて京橋さんが車を走らせ始めた。

帰りの車内は遊び疲れたのか皆言葉少なだったスローな邦楽のカバー曲が静かに流れている。

「朔、ネムタイ」

「俺の足を枕の代わりにして良いから」

トロンとした瞳のミクに俺が膝を軽く叩いて見せると、ミクはゴソゴソとシートの上で丸くなって俺の足に頭をおいて直ぐに寝息を立て始めた。

しばらくすると今度は左肩に重さを感じる。

見ると望も疲れて俺の肩に凭れて寝息を立て始めた。

子どもの頃から望は車で出掛けた帰りは必ず寝てしまうのが癖の様になっていた。

助手席で船を漕いでいたら京橋さんが気にするだろうと思い後ろに

座らせたのだった。

「ちゃんとお兄ちゃんしているんだな。朔は」

「涼さん。まあ、望は一応妹ですから。世話を掛けているとは思いますがね」

「ちょうど2年が経つんだな、望ちゃんが朔にべったりになって世話を焼くようになって」

「でも、湊さん。望は昔から俺のケツを追い掛け回していましたからね。今じゃ上から視線で監視されていますけど」

「それだけ、朔の事が心配だったんだろ。無理もない仕方の無い事だけどな、大好きな人を亡くしたんだから」

「それは京橋さんだって……」

「俺達は家族だ、覚悟は出来ていたよ。でも、お前は最後まで諦めなかった」

「馬鹿だったんですよ。拳句に歌まで失って、皆に迷……」

迷惑と言おうとして言葉を止めた。

無言のまま前を向いたまま3人とも中指を立てている。

本当の仲間に『迷惑』は禁句だった。

おみや・ss

休み明けにハルのバイク屋に立ち寄る。

いつもの様に便の空き時間にだ。

すると運良く四天王が揃い踏みだった。

「おーす」

「ういーす」

「隊長、ご苦労様です」

「今日はミク様は？」

「ああ、望と一緒にだよ。今日は大学の方が休講なんだって」

「はあ〜ミク様と望様がご一緒って……」

何を妄想しているのか、恐らく聞きたくない台詞が聞こえる前に涎をたらしている四天王に釘を刺す。

「ガールズラブなんてありえないからな。どちらがタチでネコかなんて考えるなよ」

「た、隊長！ 神聖な2人になんてことを！」

聞きたくない台詞を思わず自分で言ってしまい突っ込まれてしまった。

ヲタクの悲しい性なのだろう。

「で、ツッキー。昨日は何をしてたんだ、休みだろ」

「ああ、先輩に連れられてミクと望とスパリゾートに遊びに行ってきた」

「……………」

「お土産なんだけど」

俺の言葉など届いていないらしい。

5人が口をあぐりと開けたまま、背後には超A級のブリザードが吹き荒れている。

「み、水着……」

「ミク様と望様の……」

「ツーショットで……」

「隊長特権なのか？」

「……」「許しまじ！」「……」

ハルまでもが怖い顔になり俺の事を睨みつけている、ハルの場合は望がメインなのだろうが……

仕方なく、土産の写真を四天王の前に突き出した。

何故に写真かなんて聞くまでも無いだろう、ヲタクに温泉饅頭なんて無用の長物で本人の生写真こそが真のお土産なのである。

再び四天王が固まっている。

「こ、これは……」

「み、水着バージョン……」

「ミク様じゃ……」

「それも、ウルウルバージョン……萌えすぎる」

一言だけ、言わなくても判ると思うが付け加える。

「他に流すなよ、絶対に」

「そんな罰当たりな事を我々四天王がするとでも、これは俺達だけのお宝だ」

「か、神が光臨した」

「奉らねば」

「ああ、死んでも良いかも」

その写真はミクが始めて滑ったトンネル状のウォーターライダーの写真で唯一天井が無い所で写真を撮られてそれをプリントアウトしてもらった写真だった。

辺りを警戒しながら後生大事に4人が写真を壊れ物でも扱うように懷に仕舞いこんだ。

まあ、この界限がすっかりミク場になってしまい、ミクの生写真ともなれば恐ろしい争奪戦が起こり死者までも出てしまうかもしれないのは簡単に想像が出来た。

ハルには温泉饅頭と写真のどちらかを……

「どっちが良い？」

「……………」

何も言わずハルは両方を掴んでビクとしなかった。

「あのな」

「……………」

突っ込もうと思ったがハルの顔が段々真っ赤になっていき涙目で俺に訴えかけている。

笑いそうになるのを堪えて両方ともハルに渡した。

温泉饅頭は世話になっている親父さんにミクと望のツーショットの水着姿写真は恐らくハルの枕元にでも飾られるのだろう。

のーこめんと

「ねえ、朔。聞いて良い？」

「駄目って言っても聞くじゃないか望は」

「当たり前でしょ」

ミクが現れミクが普通に周りの人とコミュニケーションがとれる様になってきて、東京も大分寒くなってきていた。

そんな夜、いつもの様に望は俺の部屋に居た。

「あのね、何で最近はヲタクみたいな鴉スエツトじゃなくてパジャマなの？」

「単純明快、温かいから。裏が起毛になっていてポカポカだぞ」

「で？　なんで彼女がお揃いで男物のパジャマを着て寝ているの？」

朔の趣味かなにか？」

「その沸いていそうな頭をキンキンに冷えたビールで急冷してやるうか？」

週末の晩は何故か俺の部屋でビールを飲むのが習慣になりつつある。こんなヲタクな兄貴と酒を飲むより、友達と遊びに行くなり飲みに行くなりすれば良いのに望は全くそう言う事に感心がなかった。

感心が無いというか前に一度だけ理由を聞いた事があるが、男の話にファッションの話や酒が進めば愚痴や悪口になりうんざりだと言っていたのを思い出した。

それが普通の女の子だと俺は思うのだが望の浮いた話も聞いた事が無いし、ファッションに関してはシンプルイズベストな格好しかない。

まあ、兄貴の俺が言うのもなんだが望の様に容姿端麗・頭脳明晰・文武両道な才色兼備では男の方がドン引きしてしまうかもしれない。天はなんで二物も三物も与えてしまったのだろう不思議に思う時がある。

「で、何でなの？」

「まだ、言うか？ 俺が着ていたのをあいつに取られたんだ。朔のが温かそうだって、仕方なくもう一着買ったんだよ」

「お揃いで？」

「あいな、これは俺のお気に入りだぞ」

「そうだったわね。朔は気に入ったらそれしか着ないものね」

「別に拘りなんてないけどな」

軽く鼻を鳴らして缶ビールを口に運んでいる望の顔はアルコールを摂取しているのに全く変化が見られなかった。

それに反して俺はと言うと昔から一口だけで真っ赤になってしまう体質だった。

「もう一つ聞いて良い？」

「くどいぞ一々確認を取るな、酒が拙くなる」

「それじゃ遠慮なく聞くけど。どうして朔は家に居る時は彼女の事をあいつって言うのかな？」

「……………」

「答えられないと？」

ノーコメントか酔った振りで誤魔化そうすると望が飲み終えて持っていた缶ビールの缶がグシャと音を立てて潰れた。

「あはは、怖すぎるわ！ 普通は横を掴んで潰すだろう。な、何で縦に潰せるんだ？」

「あら？ 本当に」

缶は握りつぶしたようにではなくプレスしたようにぺっちゃんこになっていた、酒の所為で望のリミッターが吹っ飛んでいるようだった。

答えなければ何を潰すつもりなのだろう……

望のフルパワーで……

考えただけでゾッとする。

「名前を呼ぶと敏感に反応するから」

「例えば？」

「嫌だろ俺達だって何かに過敏反応をするなんてだから」

「だから例えば？」

テーブル越しに体を乗り出して顔を近づけてきた。酔って少し潤んだ瞳の中に殺気を感じる。

実を言つとこれだけは本当にやりたくなく見逃して欲しかったが望には俺のそんな気持ちが判るはずが無く、仕方なくあいつの名前を聞こえないくらいの声で呟いた。

「ミク」

するとベッドで爆睡しているはずのミクがゴソゴソと起きて、ボーとした表情でキョロキョロと何かを探している。

そして俺の顔を見つけるとニコッと笑顔になった。

「朔、ヨンダ？」

「ゴメンな、起こしちゃって。眠って良いぞ」

フルフルと首を振りながらモゾモゾとベッドから這い出してきて…

…

フニヤと満面の笑顔を零して俺の膝を枕にして子猫の様に体を丸めて眠ってしまった。

「か、可愛い！ 可愛過ぎる！ 女の私でも萌えちゃいそう」

「可哀想に」

「はあ？ 可愛いの間違いじゃないの？」

「あのな、寝起きが最悪な望がそんな事を言うか？ 今度……動画で……」

「動画で？」

望の手刀もとい喉輪のように首を掴まれ徐々に力が入る。

歌を歌えなくなるところじゃなくて喉が潰れて声が出なくなりそうですから。

両手をあげて参ったのポーズをとるとゆっくりと望が手を離れた。

「朔は彼女を見てなんとも思わないの？ 一応健全な青少年でしようが」

「あの、その健全な青少年の部屋に何故あいつを置いておく？」

「……ご主人様だから」

「それじゃ俺からも質問を一つ。望はなんで彼女と呼んでいるんだ？」

「黙秘権を行使します。その件に関しましては弁護士を……」

「ああ、もう良いや。どうでも良いや。めっちゃ面倒臭い。聞くのも鬱陶しい」

望の他人行儀なある意味機械的な返事が返って来る、一切話さないと云う意思表示なのだが俺の一番嫌いな返答の仕方だった。

ミクを起こさないように抱き上げてベッドにゆっくり寝かせて、望に一言だけ言い切った。

「寝るから」

「朔、明日は休みでしょ」

「適当に対処します。家に居るなり、散歩するなり。気にしないで下さい」

俺も機械的に返す、望とこれ以上の会話を続ける気も失せてしまった。

学園祭

翌日は日曜日で仕事は休みだった。

秋も深まりと言うか寒い。

寒さが苦手な俺にとって嫌いではないが苦手な季節が訪れようとしている。

思わず羽毛布団に包まった。

もう少しだけ休日のこの幸せな時間を……

「朔、オキテ。何か キコエル」

「何も聞こえニヤイ……」

「朔、キコエル！ オキテ」

ミクが必死になって俺の体をゆすっている、ゆっくり目を開けるとぼやっとミクの格好が目に入ってくる。

今日は、フェミニンな格好ではなくシンプルに細身のジーンズに少し厚手の長袖のカットソーを着ている。

色もいつもより控えめでカットソーは深いグリーンだった。

頭が覚醒してくるとミクの言っている通り何か音楽のようなモノが微かに聞こえてくる。

この近くの高校だろうか、確かこの時期は学園祭があちらこちらで行なわれているはずで。

望の通う大学でも確が行なわれるはずなのだが望は大学での事を殆ど俺には話さなかった。

故に俺も望の通う大学にも遊びに行ったこともないし望の大学生活を垣間見る事は殆ど無いに等しい。

話を戻そう。俺達が住んでいるマンションの近くには高校や中学校などいくつかの学校が点在していて、その中のどこかの学校が恐らく文化祭か学祭をしているのだろう。

そしてミクの目を見れば一目瞭然で、もし行かなければすこぶる残

念そんな顔をして恨めしそうに俺の顔を見上げるのだろう。

どこでこんな仕草を教えてもらったかなんて聞かずともお隣さんくらいしかあり得なかった。

「仕方が無い、着替えて散歩がてら行くか」

「イクノ？ 朔？ ホントウニ？」

「少しだけ待つてろよ」

「ウン！」

ジーパンを穿き長袖のカットソーを着る色は地味なグレー。

そして顔を洗って準備完了、上着に黒いショート丈のダウンを羽織る。

ミクはブラウン系のチェック柄のポンチョの様な上着を頭から被って髪の毛を一生懸命に服の上に出している。

女の子は上着だけでこんなにガーリーになるもんだなと思った。

ミクの上着はポンチョに見えるが五分袖のフードが付いているドルマリンスリーブのチュニックシャツだった。

何となくもう一つアクセントが……

確かクローゼットにあったはずだ。

クローゼットを開けてゴソゴソと探すと直ぐに目に付いた。

それはカワセミの綺麗な青い羽があしらわれているビーズ付きの革紐のネックレスだった。

ミクの首に掛けてやると嬉しそうにクルリと体を回転させる、するとふわりとカワセミの羽が揺れた。

マンションを出て音楽が聞こえてきた方に歩き出す。

散歩にはちょうど良い天気だった。

秋晴れと言うのだろうか澄んだ青空が広がり風はそれほど無くても差しが温かく感じる。

ミクが俺の前に現れてから、俺が忙しくてミクを連れて仕事できない時や俺が出かけている時には望がミクの側に付いて何かをいつも教えていた。

そして最近ではなにやら料理や家事を教えているらしい。

果たしてミクに出来るかは疑問だが、家事が殆ど出来ない俺には何も口出しは出来なかった。

15分ほど歩いていると音楽がはつきり聞こえだし校内放送で何か案内をしている。

どうやらこの先にある近所では大きな目の都立高校で学園祭をしているようだった。

入り口で一応確認してから校内に入る、昨今では色々な事件が多発しているのを受けて校内に部外者を入れる事を禁止している学校が多いからだ。

近所に住んでいる事を告げると快く校内に入れてもらった。

まあ、入り口でもミクの姿に生徒やら父兄が目を見ん丸くして驚いていたが最近では全くといって良いほど気にならなくなってしまった。

それより、そんな初音ミクを連れているヲタク丸出しの俺を校内に気安く入れてしまうほうが気になったりした。

校庭には模擬店が立ち並び校内では色々なクラブやクラスの発表が行なわれているらしい事が校門で親切にも渡してくれたプログラムに書いてある。

体育館では演劇部や吹奏楽部の演奏や劇が始まろうとしている。

そして目を引いたのが校庭の一角にステージが組まれバンドの演奏の準備がされていた。

俺が聞いて知っているバンドブームは第2次位からでBOWY・HOUND DOG・レベッカ・プリンスエスプリンスやSHOW-YAが走りでコピーバンドが何処の学園祭などでも演奏をしていた。

その後THE BLUE HEARTS・ユニコーン・JUNSKY WALKER(S)・THE BOOM、は四天王と呼ばれていた。

そして、いかすバンド天国（通称イカ天）なるテレビ番組で対バン形式の審査が行なわれ数々のアマチュアやインディーズバンドが世に出る気掛けになったが、今残っているのは確かBIGINくらいだったはずだ。

それともう片方ではX JAPANの登場でビジュアル系と言われるファッション性を重視したバンドが一大ブームを起こした。

そしてビジュアル系以外はなりを潜めていたがアニメの『けいおん！』が再び軽音部としてバンドブームを引き起こそうとしている。

ここの学園祭でも学校の軽音部などがステージでオリジナルの曲でも発表するのだろう。

ミクに吹奏楽でも聴くかと聞いたたら大きく首を振られてしまった。そしてミクが初めて出会った時の様に俺の唇に指を軽く触った。

「歌が スキナノ。 音 ジャナイヨ。 朔」

「そっか、吹奏楽は今でこそ最近のミュージックを奏でるけどクラシック主体で歌は無いもんな。ミクにはバンド演奏の方が良いかもな」

そんな事をミクとステージの近くで話をしていると不意に後ろから女の人に声を掛けられた。

その声には聞き覚えがあり……

「朔君？ 朔君やないの？ ああ、そうや。やっぱり月島 朔君や」
「お久しぶりです」

その女の人は、ショートボブの髪の毛を揺らしながら満面の笑顔をしている。

大人ばいブルーグレーのシャツワンピに紺のカーディガンを羽織っていた。

「相変わらず……わお、彼女なん？ ちょっと変ってる子やね」

「いや、先生に言われたくないですよ。相変わらずチンマイですね」

「ひ、酷いやん！ 久しぶりに会った先生に対して言う言葉なん？」

「あはは、すいません。彼女はミクですよ、知りませんか？」

「あの、歌を歌わせるソフトのん？」

「ええ、今は事情があつて俺の所にいますけどね」

「じゃ、彼女なんやね。安心したわ」

先生だけは相変わらずも何も動じもせずにミクをあっさり容認してしまつた。

そんな話をしているとミクが俺の裾を可愛らしく引つ張つた。

「朔、ダレ？」

「ああ、この変な関西弁交じりで話すのは俺が高校生だつた時の担任だつた佃先生だよ」

「センセイ？ 朔、コウコウセイ？」

「俺がちょうどミクくらいの年の時に行つていた学校の先生だよ」

「デモ、チイサイヨ」

「あのな、小さくても大人なで先生なんだ。一応」

「ああ、一応言つたな。一応言つたな」

確かにミクの言うとおり佃先生は背が低いどう見ても160センチは切つていると思うが自称160センチなのだそうだ。

そんな話を話しているとステージ上では高校の軽音部らしき女生徒達が音合わせをし始めた。

しばらく聴いていると間延びした音が聞こえて同時に女の子の悲鳴が聞こえる。

「やーん、弦が切れた」

「もう、早く交換してよね。時間ないんだよ」

「ゴメンゴメンって、本当にゴメン。チューナーを忘れて……来たみたい」

「はあ？ どうするの？ ギター無しでするの？」

「だって、お家でメチャ練習したんだよ。それで忘れて来ちゃったんだもん。ああ、美香ちゃんがいるじゃん。先生！」

チンマイ佃先生こと美香ちゃんが呼ばれてステージに駆け寄る。

リハーサルでこれじゃ先が思いやられるなんてちょっとだけ考えていると再び名前を呼ばれてしまつた。

「月島君！ 月島 朔君！ お願いできへんかなあ？」

「朔、アノ子達 ノ 歌 キキタイヨ」

あまりバンドに係わりたく無い気持ちがいっぱいで躊躇していると、ミクにまで言われてしり込みしていたら男じゃないかと独りで考え嫌々風に返事をした。

「あのな、佃煮。勘弁してくれよな、事情を佃煮が知らないわけじゃないだろ。それに佃煮なら何てことない事だろうが調弦なんて」

「つ、佃煮言うたな。何回も佃煮言うな！」

険悪な雰囲気になっていた軽音部の女生徒が笑いを堪えるようにしている。

先生はと言うと頬を膨らませてまるで子どもが拗ねているみたいだった。

「アラサーの大人が子どもみたいに拗ねても可愛くないですよ」

「あ、アラサー言うたにや。子るも見たいって言うたにや」

生徒達は限界だった様だ、パンツが見えそうなくらい短い制服のスカートなんて気にしないかの様にステージ上で腹を抱えて笑い転げている。

そして先生は……昔と何も変わらず子どもの様に立ち尽くして涙をポロポロ零していた。

「泣くなよ、先生なんだろ。昔から泣き虫なんだから」

「うぎゅ……朔君がいじわりゅしゅるかりやらやる」

「で、ギターが無いと困るんだろ」

「うん」

しゃがみ込んで望にいつも持たされているバンダナで先生の涙を拭くと直ぐに笑顔になった。

「ほんま優しいなあ、朔君はやっぱり」

「あのな……」

昔から時々、嘘泣きなんじゃないかと思ったことがあった。

佃先生は子どもみたいに小さくて泣き虫だがギターを持たせると別人の様にギターが上手く、それ故に恐らく今も軽音部の顧問なのだ

ろう。

「ほら、時間が無いんやろ。朔君にギターを渡し」

「へえ、美香ちゃん。このヲタク見たいな人に？」

「朔君はヲタクやけどそれだけじゃないんよ。それに美香ちゃん言わんの、先生やで」

「は、はい」

女生徒の反応は至極当たり前なのだろう、俺自身もやる気の無い何処からどう見てもヲタクか根暗の格好をしているのだから。

渋々、リードギターの子が弦を交換したばかりの愛用のギターを俺に渡した。

軽く弾くと微妙に調音が全ての弦でずれている。

軽く弾きながらチューニングしていく、音を合わせた後で軽くギターの音慣らしをしてギターを返すと……

「す、凄い。絶対音感の人始めてみた」

「それに、メチャ上手くない？」

いつの間にかヲタクと言う不審人物から憧れの人を見るような瞳に変っている。

そろそろヤバイと思いステージを離れようとすると思煮じゃなく生徒に声を掛けられた。

「あのう、美香ちゃん先生を知っているんですか？」

「ああ、俺が通っていた高校の担任だったからね。まあ、その頃の俺は凄く荒れてて手に負えない生徒の一人だったけどね」

「ええ、こんなにギターが上手くって絶対音感まで持っているのですか？」

「そんな事は当時の俺には判らなかつたんだよ」

「あんな、朔君は荒れてても絶対に女の子には手を上げなかつたんやで。ほんまは優しい男なんよ」

「あのな、思煮。女の子になんか手を上げてみる、お袋に殺されるわ」

「あはは、そうやね。朔君のお母さんはメッサ怖い人やもんな」

「ぶつ、佃煮って何ですか？」

「佃先生はギターがめっちゃ上手くって昔はバンドを組んで居たんだ。自己紹介の時に黒板にサインを書いたんだよ、でそのサインが。ほら、書いてみてよ」

「うっ、今は上手くなっただんやから」

そう言いながら佃先生が楽譜の裏にフルネームでサインを『Tsukuda Mika』と……大爆笑だった。

先程以上にパンツ丸見えの状態で転げまわって腹を抱えて笑っている。

先生は涙を堪えるので必死だった。

「ほ、本当だ。どう読んでも『つくだにか』にしか読めないよ」

「酷いよ、ちゃんとMって書いてあるやん！」

「いや、無理だよ。美香ちゃんNにしか見えないもん」

「もう、朔君の所為だからなあ、責任は取ってもらっで。明日から佃煮になっちゃおうやん」

「俺とミクは演奏を楽しませてもらうよ」

そう言うのと生徒達の視線がミクに集まる。

今まで俺の印象が強すぎて気付かなかったのかもしれない。

「うわあ、可愛い。本物のミクちゃんですか？」

「まあ、本物と言えば本物かな」

「ここら辺では噂でしか聞いたことがなくて、一度会って見たかったんですよ、あれ？ ミクちゃんの彼氏って確かインディーズの……」

「佃煮。じゃな」

何処まで噂が流れているんだ、まあ俺の素性なんて調べれば直ぐだろうけれど昔住んでいた所ならともかく。

今は知らない人間の方が多いはずだからだ。

ステージを後にしようとする完璧に佃煮とミクに捉まってしまっていた。

「ほれ、朔君。観念しいや」

「朔、歌 キキタイよ」

「あのな、歌の歌えない俺に何をしろって言うんだ？」

「私の生徒だったんだからこの子達は朔君の後輩やん。その後輩に『Loop』のリードギターとして教える事はあるんちゃうの？」

それに彼女のミクちゃんの期待にも答えてやらんといかんのかな？」

完全に彼女達に俺の少し前の素性がばれてしまった。

隠す必要の無い事なのかもしれないが俺の所為で活動も休止中なのに、俺の口からそうだったなんて事は口が裂けても言えないし言うつもりもなかったからだ。

「ほら、眼鏡なんてせんで、髪の毛を上げてや」

「はいはい」

佃煮に言われるままに眼鏡を外し髪の毛を後ろに流して背筋を伸ばす。

すると小さな歓声上がる。

「うわぁ、憧れの『Loop』のSakuさんだ」

「し、信じられない。美香ちゃんが言ってた事は本当だったんだ」

「あのな、佃煮。この子達に何を吹き込んであるんだ？」

「私は別になんも。ただ教え子が『Loop』のメインボーカルだつて言っただけやけど」

彼女達の瞳は熱狂的なファンの子達の瞳とは違い憧れの瞳だった。

俺はバンド時代から外見しか見てくれない多くのファンの子には失礼だが苦手だった。

しかし、あれだけ熱い瞳で見られて何もしてあげられないのはちょっと可哀相かと思いギターを借りて軽く1曲だけ弾きながらハミングしているとミクはそばで嬉しそうに聴いている。

そしてリハ中なのに遠巻きに人だかりが出来始めていた。

「これで勘弁してくれないか？ 今は活動も休止中だからね」

「え、解散したんじゃないんですか？」

「解散は一応していないよ。個々に活動はしているけどね」

「あの、Sakuさんは？」

「何故、バンドが休止になったのか噂では知っているでしょ」

「ええつと、ボーカルの声が出なくなっただけ」

「歌えなくなっただよ、歌を。今はトラックの運ちゃんだよ」

「えっ……」

かなりシヨックだったらしい、それはそうだろう憧れのバンドのボーカル兼リードギターが歌を歌えなくなりトラックの運転手をしているのだから。

まあ世の中にはどうしようもない仕方な無数の事が多いのが現実なんだ。

それを受け入れられなくて俺は歌を歌えなくなったのだが。

数組のバンドが音合せのリハをしている。

俺とミクは最前列に座って本番を待ちリハを眺めていた。

本番のステージが始まる、渡されたプログラムには軽音部が最後の演奏になっている。

他のバンドもかなりの腕前だった。

コピー曲に数曲のオリジナルの曲を織り交ぜて流れを作っている。場数をかなりこなしている証拠だろう。

そして佃煮もとい佃先生が顧問の軽音部の演奏が始まった。

流石の一言だった。ほぼオリジナルの曲だけで流れを作り演奏の方も完璧でどれだけ練習したのかが良く判る。

昔から佃煮はバンドに関しては厳しく練習もハードだったらしい。らしいと言うのは俺の高校時代はバイク馬鹿で夜な夜な『ムーンライトダンス』に参加していたからだ。

そんな荒れた生活からバンドを始めた事を一番喜んでくれたのが佃先生だった。

そして、バンドが休止になった時も本気で心配して悲しんでくれたのも佃先生だったからだ。

故に俺にとって佃先生のお願いには出来るだけ答えたかったって…

…

佃煮がステージの袖で俺に向って両手を合わせている、まさか……
そう思った時には既にステージ上のメインボーカルの子がマイク越しに口を開いていた。

「今日はありがとう。本当は今の曲がラストなんだけど、今日は凄
い素敵な出会いがあってもう一曲だけラストナンバーに歌いたいと
思います。で、どうしてもギターをお願いしたい人が居るんです」

「月島先輩、宜しく願います」

一呼吸おいて俺が呼ばれた。

正直躊躇ってしまう、公の場所でギターを弾くのはもう無いと思っ
ていたから……

しばらく気まずい沈黙が流れるとミクの声が耳元でした気がする。

「大丈夫、朔なら 出来る」

そして頬に柔らかい物が触れる、慌ててミクを見ると何処までも澄
んだ瞳で俺を見ながら微笑んでいた。

「ミク、借りるぞ」

そう言いながらツインテールに結んであるミクのリボンを解き、自
分の髪を後ろに一纏めにしてステージに上がりギターを受け取った。
ボーカルの子が合図を待っている、OKサインを送るとMCを始め
た。

「この人は、インディーズバンドでリードギターをしていた先輩で
す。今は事情があって活動を休止していますが、私達は先輩が居た
『Loop』に憧れてバンドを組みました。聴いて下さい。一番好
きな曲ですバンド名にもなった……」

「Loop！」

俺が叫ぶと緊張していた彼女達の雰囲気が変わり硬さとれて優しい感
じに変わる。

ドラムが走りキーボードがメロディーを刻む。

そしてギターが……

ボーカルの子が最後は涙を流していた。

別れもそこに学校から抜け出すのに一苦労だった。

目立つ俺が飛びつきり目立つミクを連れている。

しかし、相変わらずそこは佃煮の事だきちんと逃げ道を用意して
てくれた『校外は何とかしてや』と言う言葉を残して。

びしょ濡れ

マンションに戻ってもミクは満足げで嬉しそうに部屋を片付けていた。

俺は久しぶりの緊張感からか疲れてベッドに倒れこんでしまった。しばらくウトウトしていると微かに良い香りが漂ってくる。

寝ている俺の横にミクが来たのだろう。

どれだけ寝ていたのだろう目を開けるとすっかり日が暮れて暗くなっていた。

ゴソゴソと起き出すとミクも起きてしまった。

「先にシャワーを浴びてくるからな」

「うん」

ミクがベッドの上で目を擦りながら頷いてくれた。

バスルームに入りシャワーを浴びて居ると部屋からもの凄い音とミクの悲鳴が聞こえる。

慌ててバスタオルを腰に巻いてバスルームから飛び出すとキッチンが水浸しになっていて、ミク自身もずぶ濡れになっている。

「どうしたんだ？ ミク？」

「望に ナラッタ。お料理 ムズカシイ」

「仕方の無い奴だな」

「朔、望にオコラレル」

「怒りはしないだろう。ミクは料理を……」

ミクが済まなそうにびしょ濡れになった上着を摘み上げている。

望に服を汚した事を怒られると思ったのだろう。

腰にバスタオルを巻いたままの格好で部屋に向かいミクにタオルをと思った瞬間、玄関のドアがあいた。

私が大学の講義を受けてマンションに戻って部屋に入ろうとすると隣の朔の部屋からミクの悲鳴が聞こえた。

慌てて朔の部屋に飛び込むとそこには……

今にも泣き出しそうな顔で洋服を脱ごうとしているミクとタオルを腰に巻いた朔の姿が目に見え飛び込んできた。

「朔、望にオコラレル」

ミクの言葉を聞いた途端に体が動いていた。

床が不自然に濡れているそう気付いた時には既に朔の腕を掴んでいた。

朔が何かを言おうとしたが問答無用で望スペシャルを繰り出す。

床に朔が倒れているはずなのにベッドの上に放りだされたのは私だった。

「どう言うつもりだ、望？ 俺がミクを襲うとでも」

「えっ、あの……」

その後の言葉は怒りが爆発寸前の朔の顔に何も言えなくなってしまった。

朔は冷静だがそれは冷静を通り越して触れば確実に指先など凍りついて粉々になってしまふくらい誰も近づかせないような冷たさだった。

昔、一度だけ望スペシャルを朔にかわされた事がある、その時は私の誤解で朔に激怒された事があった。

そして2度目は無いと……

朔に念を押されて……

まさか、ミクちゃんの泣き顔とあの言葉で我を無くしてしまったのかもしれない。

気付いた時には手遅れになっていた。

「出てけ！」

「朔、ゴメン。私が早とちり……」

「出てけ！ ミクも連れてとっと出てけ！」

「朔、話を聞いて！」

「黙秘権を行使します。その件に関しましては弁護士を通してくだ

さい」

それは私が何も答えたくない時に使う最終手段だった。

この言葉がこんなに冷たいものなんだって今更ながら気付いた。

「香織にも手を出さなかった俺が、ミクに手を出したと思ったんだろうが。ふざけるなよ、俺は好きで何も……」

「朔？」

「出てけ!!」

朔が有らん限りの力で壁を叩き付けた。

俯いているが泣いているのが判る、声を上げない様に歯を食い縛り溢れ出る涙がフローリングの床に零れ落ちている。

私にはそれ以上どうする事も出来ずにミクを連れて自分の部屋に戻る事しか出来なかった。

ミクはオロオロして落ち着きが無かった。

それはそうだろう初めて朔が負の感情を爆発させたのだから。

そして地雷を踏んだのは私だった。

決して踏んではいけない地雷だった。

そんな私の感情さえもミクは感じ取っていた。

「望、京橋サン？」

「ああ、これね。私は京橋さんの大ファンだからね」

私の部屋には『L o o p』時代の京橋さんの写真が引き伸ばされて沢山飾ってあった。

まあ、お陰で本人が来たときは恥ずかしくっていつも朔の部屋に案内しちゃうんだけど。

「望、ゴメン。服 ヨゴシチャッタ」

「どうしてこんなに濡れているの？」

「お料理、朔に」

ミクちゃんのそれだけの言葉で十分理解が出来た。

朔がシャワーを浴びている時にミクちゃんは私が教えた料理をしようとして、何故だかびしょ濡れになり朔が慌ててタオルだけで飛び出してきたんだ。

それを私が……我慢していたのに涙が溢れ出す。するとミクはいつも朔がミクにしている様に優しく抱きしめてくれた。

堪えていたものが決壊してしまい止め処なく溢れ出す。気付くとミクの瞳からも大粒の涙が溢れている。

「朔が ナイテル。朔が 朔が……」

それは小さな子どもが母親を求めているかの様な、いや違う一番愛しい人を求めて泣いているんだ。

私が何とかしないと自分のケツは自分で拭く我が家の家訓にして、放任主義だった母親が唯一私達に厳しく教えた事だった。

涙を拭いて携帯を取り出し一抹の不安はあるけれど躊躇っては居られない京橋さんに電話をかける。

数コールめで京橋さんが出てくれた。

「こんばんは、京橋さん」

「あれ？ 珍しいな。望ちゃんが電話をくれるなんて、もしかして何かあったの？」

忙しい京橋さんの手を煩わせる訳にはいけないけれど相談できる人が他に居なかったのも事実で、それにこれは京橋さんの妹の香織ちゃんにも係わる事だった。

一通り順を追って京橋さんに全て打ち明ける、すると少し間があり京橋さんが話しづらそうに打ち明けてくれた。

「望ちゃんには言っておくべきだったね。あのね良く聞いて、朔が香織に何もしなかったのは香織の頼みだったんだよ。そう言う事になった時に私が壊れたらってだから何もしないでって」

「それじゃ、朔が何もしなかったのは……そんな」

朔にとってそれがどんなに酷な事だったのか香織にだって判らないわけが無い、それを朔は香織の為に受け入れたんだ。

だからあんなに辛そうに……

それを私は全身から力が抜けそうになる、それを留めたのは京橋さ

んの言葉だった。

「望ちゃんには酷かもしれないけど朔には望ちゃんしか居ないんだよ！しっかりしてくれ。それに日本橋が何かを嗅ぎ付けた。ミクちゃんには気をつけて一度あいつ等の手に落ちたら2度と取り戻せなくなるんだよ。そうしたら朔はもう……」

「一応、手は打ってあるんですけど。用心します、今、ミクちゃんとは私と一緒に居るんで明日からは大学に連れて行こうと思います」

「俺らも全力でサポートするし何を差し置いても助けるからね」

「でも……」

「俺達は仲間なんだ。『Loop』なんだよ。それとミクちゃんには話がわかるか判らないけれど、きちんと朔と香織の事を伝えておいた方が良さと思う。頼めるかな」

「はい」

『Loop』は輪という意味がある、輪がいくつも繋がってどこかに繋がっている。

そしていつか元の場所に戻ってくる。そんな意味から名付けられた名前だった。

私はミクに真っ直ぐに向き合いきちんと全てを話した。

朔が『ムーンライトダンス』でバイク馬鹿になり荒れていた事。

そして私の親友だった香織のお兄さんの京橋さんに音楽の才能を見抜かれてバンドに嵌っていった事。

香織と付き合い出した頃の事も……

あの頃はね、2人とも本当にお似合いのカップルで羨ましかったし親友としてはちょっと心配だったけどね。

でも、ある時から歯車が少しずつ狂い始めてしまったの。

それはあまりにも突然で。

朔と香織がデートしていると急に香織の記憶が曖昧になって、慌てた朔が直ぐに香織を自宅に連れ帰ってきてね。

香織の両親が心配して病院で精密検査をしたら脳に腫瘍が出来てい

るって。

その腫瘍は脳の奥にあって手術が難しくってこのままだと腫瘍が大きくなり脳を圧迫し始めて、段々と記憶が曖昧になって痴呆が始まるだろうって。

手術しても高い確率で障害が残るか最悪の場合は植物状態になるって言われてね。

本人の希望で手術をしない治療を選んだの。

でも段々と症状が重くなっていき香織の精神が悲鳴を上げたの。

その姿はまるで別人だった。

大好きな朔や両親の事を罵って。

それでも朔は耐えていたんだよ、大好きだったから、愛していたから。

そして運命の日が来てしまったの、久しぶりの『Loop』のライブに香織を連れて行ってライブ中はなんとも無かったんだけど楽屋に行ったら時に発作が起きて。

それは聞くに堪えない朔の歌に対する罵声だったの。

楽屋で暴れながら叫びまくり朔はされるがままだった。

それからしばらくしてからかな、インディーズとしてアルバムを作る事になってレコーディングが始まったんだけど、朔の声が出なくなっていた。

声が出ないんじゃない歌を歌おうとすると歌えなくなっていたの。

病院でも見てもらったんだけど普通に会話が出るのなら精神的なことだろうって。

アルバムの収録が伸び伸びになって発売中止が決定されて事実上『Loop』も活動停止になってしまったの。

朔もかなり悩んでいたけどどうする事も出来ないでいた。

そんな時に、香織は病院から抜け出し自ら命を絶ってしまったの。

主治医の先生の話ではかなり痴呆も進んでいて両親の顔すら判らなくなっていたらしいから。

でも朔はそう思わなかった。

朔だけが最後まで諦めずに何をされても香織を愛して側にいたんだから。

朔と香織の事を洗いざらいミクに出来るだけ判りやすいように話した。

するとポツリとミクが呟いた。

「望、アイシテル テ ナニ？」

「愛してるは好きよりもっと大きな事だよ、深くって広いの」

「アイシテル……」

その晩、ミクちゃんは一晩中泣き続けていた。

恐らく朔の感情を感じるのだろう。

隣の部屋に居るはずなのにそれくらい2人の絆は強くなっていた。その絆の強さが仇になってしまった。

翌日、大学に連れて行くつもりが目を覚ますとミクの姿が何処にも無かった。

慌てて朔の部屋を覗いても朔の姿は無く恐らく早い便の仕事を請けて早朝に出勤したのだろう。

出掛ける朔の気配を感じてミクちゃんも部屋を飛び出したんだと思う。

直ぐに、朔の親友であり副隊長であるハルちゃんに連絡を取ると直ぐにミクちゃんの搜索があらゆる手段を使って始まった。

デビュー

ミクちゃんが行方不明になり1週間が過ぎた頃に朔から信じられない事を告げられた。

「朔、ミクちゃんの事が心配じゃないの？」

「はあ？ ミクならデビューが決まったぞ」

「で、デビューって何で？」

「ここを飛び出して日本橋さんに捕まったんだろ。飛んで火にいる夏の虫だよ。日本橋さんの事務所からデビューするってメディアじや今やマジミクのデビュー話で持ちきりだぞ」

「それで良いの？」

「あんな、くどいぞ。俺にどうしろと？ 俺の側に居ればどんな事をして守ったよ」

俺はベッドの上で不貞寝している、理由は言わずと知れたミクの事だ。

自分自身に一番腹が立ち情けなかった。

そして手を拱いている俺に愛想を付かせたのか親衛隊は独自にミクを守護すると活動を極秘裏に行なっているらしい。

が、情報は愛想を付かせた親衛隊長の耳に逐一報告が入ってきた。

レコーディングが終わった事、発売されるのは生ミクが歌う既存のミクの歌だという。

馬鹿馬鹿しい話だ、生ミクにコンピューターの歌を今更歌わせてどうするんだ？

まあ、ミクなら一度聞かせれば覚えてしまうだろうが、そんな中で気になったのは今まではしていなかった初音ミク（製品名）ならしているヘッドフォンをしているという事だ。

なんでもミク自身が何処から取り出して着けたという事だった。恐るべしヲタクの情報網だ。

なんでも情報という物はナマモノで鮮度が命らしい。
最新情報を知りたがる故のヲタク情報網なのだろう。
そしてミクのデビューの日が迫っていた。

東京最大のライブハウスZEPでデビューイベントが開かれ、そのデビューイベントにはデビューアルバムを買ってアルバムについている応募券で応募してくれた人の中から抽選で招待されとの事だった。

何がデビューアルバムだ？

既存の歌をコピーしたって素人には判りはしないアルバムだぞ。

「朔、本当にこれで良いの？ こうなつた原因は私にあるんだけど」
「くどい、俺にどうしろと？ 今は何処にいるのかも判らないんだぞ。判るとすればデビューする会場くらいなんだぞ」

「それじゃ」

「さあね、俺が居なくてもミクは大丈夫みたいだしな」

「本当に良いんだね」

「しつこいぞ、ミクは人間じゃないだろうが」

「朔、本気でそんな事を言っているの？ 朔は壊れていく香織になんて言つたの？」

いつも上から目線で喋る望みの声が沈んでいく。

俺だつて何とかしたいでも俺に出来る事なんて……

確かに言つたよ、壊れていく香織に向つて心から。

『どんなに壊れたつて香織は香織だつて』

『人として生きられないんじゃないじゃないじゃない』

『そんなの関係ない！ 香織は香織なんだ！』

でも、守つてやれなかった香織は自ら命を絶ってしまった。

どんなに辛かつただろう、どんなに心細かつただろう。

俺と一緒に逝つてあげれば……

「ふざけんな！ いつまで香織から逃げているんだ」

「俺は逃げて……」

最後まで言葉を言えずに望に腕を掴まれて投げ飛ばされた。合気道か何かの技なのだろう、望は並外れた運動神経を持っている為に色々な武道に精通している。

受身も取れず床に叩きつけられて呼吸が一瞬だけ止まる。

「けっは、げふお。誰が逃げてるんだ」

「逃げているだろ、香織の残像ばかり追い掛けて。香織は自分自身が誰かも判らないまま死んでしまったんだよ。朔だって発作を起こした時の香織が香織じゃないくらい判ってるんだろ。それを真に受けて歌まで歌えなくなりやがって。そんな朔を香織が知ったらどうなると思う？ それこそ香織は香織のままで……辛いのは朔だけじゃないんだ。香織だって辛かったんだよ、段々と大好きな人の事を忘れていくんだぞ。だから壊れてしまったんじゃないか？」

「そんな事は……」

何も判っていなかったんだ、多分。

段々と香織が遠くに行ってしまうようで、壊れていく香織を見ているのが辛くって。

それでも諦められない俺が居て守ってやれなかったんじゃない。

香織が守ってくれていたんだ。

壊れた自分がこれ以上俺を傷付けないように俺が辛い思いをしなくて良いように。

望に言われて初めて気付かされた。

そしてミクが現れなければ俺は気付く事が無かっただろう、そんなミクが今どうしているのかすら俺には判らなかった。

新月から満月へと月が満ちるように、今は時が満ちるのを待つしかなかった。

眼鏡を外して伸びきった髪を後ろでひつつめてゴムで止める、侍の出陣前の様に空気がピンと空気が張り詰めた。

踊れ

ミクのデビューイベントの当日は望の慌てふためいた電話から始まった。

「朔？ 朔！ あの馬鹿は大事な日の朝から居ないってどう言う事なの？ き、京橋さんに連絡しなきゃ」

望が慌て携帯を取り出した。

「もしもし、京橋さん」

「ああ、望ちゃんか。朔なら恐らくあそこに居るよ」

京橋さんにはお見通しだったみたいで突然そんな返事が返ってきた。

「あのあの、京橋さんは今日が何の日か知らない訳じゃないでしょ」

「ミクちゃんのデビューの日だろ、だからこそ香織に会いに行っているんじゃないかな」

「えっ、香織の所に？」

「そうだよ。細工は流々仕上げをご覧じろ、でも朔次第だからね。」

朔が本気で行動を起こさない時は俺達も動かないよ。大変だったんだよ、いくら望ちゃんのお願いで」

「この恩は必ず返します、どんな事をしても。私だって……」

「今は泣き言は無しだよ。今日一日が賭けなんだ、勝っても負けても愚痴や文句は言いこなしたからね」

「はい」

俺は何が起こっているのかも知らずに、香織に会いに来ていた。

「香織、ありがとうな。俺の事を守ってくれて」

『バーカ、何を時化した顔してんの？ 早く行け！ 愚図愚図するのが朔の一番いけないことだぞ』

そんな香織の声が聞こえた気がした。

いつも香織はライブ本番前に落ち着きがなくなる俺の尻を叩いてくれたっけ。

「また、会いに来るよ。今度はミクと2人で」

香織の眠る場所を後にして振り返ると、抜けるような青空に海風が吹き抜け近くのコスモス畑のコスモスの花びらがヒラヒラと舞い上がった。

それはまるで香織がバイバイと手を振っているようだった。

スペシャルハルチューンのベスパをかつ飛ばして香織に会いに来た。帰日もベスパをかつ飛ばせばミクのデビューイベントに間に合うはずだ。

それは水戸街道の上り線の土浦辺りで起きた。

流石、ハルがチューンしただけの事はあるって……

カランカランと突然乾いた音がしてベスパがいくらアクセルを開けてもスカスカで反応が無く減速する、まるで何かが完全に抜けてしまった様な音だった。

「クソ！ ふざけんな。何がハルチューンだ」

「呼んだか、月」

「はあ？ ハルが何でこんな所に……」

俺がベスパを止めてヘルメットをアスファルトに叩きつけるとハルが『ムーンライトキッス』の頃の呼び名で俺の名を叫んだ。

声のする方をみると満面の笑顔のハルと後輩が2人。

その傍らにはタイヤウォーマーをつけてエンジンが温められた綺麗なメタリックブルーのCB400SFがライダーを待っていた。

「何でこんな所にだ？ 水臭いぞ、月。俺達は仲間だろ。お前が考えてる事なんてお見通しだ、それに俺が弄ったベスパがどの位で逝くかなんて野暮な事を俺に聞くなよ。で、どうするんだ」

ハルが口の端をクイツと吊り上げ、バイクのシートをポンポンと叩く。

それは行けの昔からのハルの合図だった。

「久しぶりにジャックする」

「よしや！ 皆、聞いたか？ ジャックだ！」

俺には意味が良く判らなかったがハルは昔の様に連絡用のインカム

を付けている、それは『ムーンライトダンス』時代の仲同士の連絡用に着けていたものと良く似ている。

そしてハルの言葉が俺には理解出来ないが何かの合図なのだろう。

「月、いけるのか？ タイヤはレーシング用だ。チューンもキンキンだぞ、それとこれは望姫からのメットだ」

「はあ？ 誰に言ってるんだ。俺は『ムーンライトダンス』の月だぞ」

「よっしゃ！！ 派手に踊れ！！」

ハルと話している間に俺の膝には後輩がプロテクターを着けてタイヤウォーマーを外していた。

そして望からだと言うヘルメットにはツインテールの様なアンテナが何かが2本揺れていた。

俺がメットを被りバイクに跨るとハルが何かのスイッチを入れたみたいだった。

そんな事に構っている時間も無くアクセルを開けるとフロントが浮く、力でねじ伏せて更にアクセルを開けた。

「お前達も良く見ておけ、あれが『ムーンライトダンス』たる本当の所以だぞ」

「スゲー、まるで本当に踊る様に車の間を抜けてった」

「プロテクターから火花が散ってる」

「夜なら本当にもっと綺麗だぞ」

その頃、四天王達は……

「よしゃ！ 皆、聞いたか？ ジャックだ！」

「……キタ（。。。）……………」

そして、ハルの合図は恐ろしい事に一瞬にして世界中を駆け巡った。

バイクを駆り東京に向う。

ヘルメットから声が聞こえてくる、それは四天王のリーダーの声だ

った。

「隊長、大変です。ミク様の様子が変わたとスタッフとして潜り込ませた潜入隊から連絡が」

「これはそのまま喋れば……」

「何を言っているんすか？」

望の持ってきたメットは普通じゃないのが実感できた。

恐らくハルのインカムとも繋がっているのだろう、そして……

「何が変なんだ？」

「周りからの音をヘッドフォンで一切シャットアウトしているみたいだと」

「それじゃ、あいつは何も聞いていないのか？」

「通りすがりに話しかけても返答が無かったそうです」

「いつからなんだ？」

でも、どうやって今まで歌を聞かずに？

食事ですか？

そこで一つの仮説が頭を過ぎる。

それはあり得ない仮説だったがどう考えてもそこに行き着いてしま
う。

ミクは今まで自分で聴いた歌を自分の栄養源にしているのではない
か？

ミクがプログラムで動いているならどこかに記憶領域があるはずだ。
そこから歌を取り出せば何とか凌げるのかも知れない。

でも、それでは記憶を無くしてしまうのではないか。

最悪の場合は……

それは香織と同じ症状じゃないか記憶をなくし、今まで聞いた歌も
そして俺の事も……

アクセルを更に開けた。

すると今度はヘルメットのシールドに文字が映り始める。

それはまるでパソコンのモニターのようだったが視界は極めてクリ
アーだった。

「メールなのか？」

『先輩！ 絶対にミクさんを助けてあげて！』

『もう一度、先輩のギターが聞きたいです。その時は歌もお願いします！』

『朔君、必ずミクちゃんを助け出してや。これがラストチャンスなんやで！』

それは佃先生と恐らく軽音部の女の子達からだ。

一体望みはこんな物を何処から持ち出したのだろう。

そしてもう一つだけ疑問が、これだけ法定速度を無視してバイクを飛ばしているのに国家権力の権化の様な奴等がまったく現れなかった。

それどころか逐一俺のヘルメットには道路の状況が流れ込んでくる。そして中には信じられない言葉が流れ込んできた。

「○ 料金所確保」

「＊ チェックポイント通過」

ミラーで見るとド派手な痛單車が確かに路肩に止まっていて、片手を突き上げている。

途中にあるはずの料金所にも痛單車や痛車が詰め掛けている。何が起きているんだ？

俺自身は全く理解できていない所で大きな何かが動いている。

このヘルメットならあいつ等と会話が出来るはずだ。

「四天王、お前ら何をしているんだ？」

「……ヲタクの底力を舐めるなですう！」「……」

ハモツた様に即答が返ってきた。

ZEEP

都内に入ると流石に車が増えてくる。

車の間を縫う様に走ると速度が上がらないが方法は他に無くかなりの時間を食ってしまった。

「クソ、下で行っても……無理か」

辰巳JCTを抜けてもう少しでZEEPだというのに開演時間が迫っていた。

「有明2通過」

そんな声が聞こえてくるとヘルメットの中にミクの声が聞こえてきた。

デビューイベントが開演してしまったのだ。

「ミンナニ ツタエルヨ 心カラノ ランランルー」

ミクの声は機械的で前に聞いたことがある初音ミクベストのCDの声そのものだった。

そしてシンセサイザーで奏でるような前奏が始まる。

しかし、ミクの歌声は聞こえなかった。

その代わりに四天王のリーダーの声が飛び込んできた。

「た、隊長。ヤバイよ！ ミク様の体の変だ、なんだか向こうが透けて見えるような……」

すると、ミクが俺の前に現れた時と同じテクノぽい曲が流れ出しヘルメットのシールドが光だし、慌ててシールドを跳ね上げる。

そして機械的な声がこだました。

「カリケイヤク ガ シュウリヨウ シマス ホンケイヤク ヲ シテクダサイ」

「朔！ 彼女が消えちゃうよ！」

望の泣き叫ぶ声がヘルメットに響く、望も会場の何処かに潜り込んでいるのだろう。

俺はZEPの裏口に付いたところで、ミクには声が届かなかった。

「朔、とりあえず歌え！」

「京橋さん？」

「早く！ 繋がってるから」

訳が判らない京橋さんや涼さんまでの声がする。

「朔ちゃん、ミクちゃんを引き止めて！」

湊さんの声で我に返り口から出た歌はミクが一番楽しそうにしてくれた麦畑の歌だった。

歌をゆつくり口ずさみながら裏口に入ると見覚えのあるスタッフや四天王が待ち構えている。

そして急いでステージ裏に向う。

ヘルメットを外すとヘッドセットが頭につけられニアプロテクターを外され、着ていたダウンまで脱がされてしまった。

ステージは目の前だった。

ステージのモニターは全てミクが現れた時と同じ様に真っ白な光りを放っている。

そしてミクの体も不安定に光り出して宙にうっている。

「サイシュウ ケイコク ケイヤク ヲ……」

自分自身で見ているのに信じられない光景が目飛び込んでくる。

「朔！」

ミクの直ぐ後ろで京橋さんがベースを構えている。

「朔ちゃん！」

俺のすぐ右にはドラムのステックを掲げる湊さんが。

「朔！ 急げよ」

反対側では涼さんがキーボードの前で待ち構えている。

「朔、行っておいで」

相変わらずの姉貴のような上から目線で望に愛用していたギターを渡された。

「ミク、これが契約の証だ！」

俺の声が会場に響き渡るとミクの体の揺らぎが納まった。

そして今まで歌えなかった歌が俺の喉から心からあふれ出した。
その曲は『Fortune Love』この曲は愛する人の為に書かれた曲だった。

切ないくらい愛しい人に伝えたい。

何があっても離さないきつと守って見せると言う内容のバラードだった。

静かだけど力強く殆どアカペラに近い状態だった。

それは『Loop』だから成せる技だった。

スタンディングで行なわれている今日のイベントでは3000人弱の観客がいるはずだ。

そこにジーンズにTシャツを着てストライプのシャツを羽織った逸般人が飛び込みでミクのデビューステージを台無しにしたにも係わらずブーイングが起こらなかった。

ブーイングが起こらないどころではなく、会場は静寂に包まれている。

こんな静寂に包まれるライブ会場は初めてだった。

どうして言いものかと考えていると再び機械的な声がした。

知らない間にモニターの光りも納まっていた。

「ホンケイヤク ヲ カンリヨウ シマシタ オメデトウ ゴザイマス」

「な、何がオメデトウ何だ？」

不思議に思いミクを見ると綺麗な瞳から涙が零れている。

そして……

「朔、大好き。愛してる！」

そう言いながら俺に抱き付いてキスをしてきた。

会場からどよめきが上がる。

最前列に居た女の子が声を上げる、その女の子はヲタクになんか見えないがこの会場に居るという事は恐らくヲトメなのだろう。

「ループだ！」

女の子の声を皮切りに会場が『ミク』と『ループ』の掛け声に包ま

れていく。

この感覚がライブだったけど正直戸惑ってしまった。

するとベースの弦を爪弾く安心感のある音がする。

チンチンと急かす様にシンバルが弾かれる音がする。

覚悟を決めるとリズムを刻むキーボードの鍵盤が鳴る。

「朔、早く一緒に歌おう」

ミクが笑顔で俺に言った。

大きく息を吸いマイクに向かって叫んだ。

「LOOP！」

会場とステージが一体になった瞬間だった。

告白

たった2曲だけで汗だくになっていた。

そしてたった2曲なのに観客は満足そうに帰って行った。

お礼のMCをミクと俺が交互に最後の観客が居なくなるまでする。
それが礼儀だと思ったから。

MCが終わり控え室に行くと京橋さんに涼さんと湊さんが笑顔で迎えてくれる。

そして控え室の奥には苦虫を噛み潰したようなスーツ姿の日本橋さんが2人のダークなスーツを着た厳つい男2人に監視されている。
そこに望が現れて厳つい男に声を掛けた。

「ご苦勞様です。無事に保護する事が出来ました」

「それでは連行します」

2人の男は口振りから刑事だったようだ。

日本橋さんが刑事の手を払い除けた。

「一体、何の容疑なんだ？ これじゃまるで犯人扱いじゃないか？」

「逮捕状がここに、未成年者略取及び誘拐罪だ。彼女を営利目的で略取した疑いもあるので、営利目的等略取及び誘拐罪になるだろうけどな」

「ふざけるな。前者より後者の方が罪が重いだろうが」

「あら、良くご存知で。でも彼女を営利目的で連れ出したんですよ」

「馬鹿か、この糞女。ミクは製品だぞ、人間じゃないんだ。人間じゃないければどう扱おうが俺の勝手だろう」

「言うわね、その製品を人の所から持ち去ったのは誰かしら？」

「はん！ フラフラと歩いてた所で声を掛けたんだよ。そこに居るヲタクに歌を聞かせてやればきつと戻って来るってな」

日本橋さんが悪態をつきながら望に喰って掛かるが、手は出せないように刑事に制されている。

望は触れればざっくりと切れそうなくらい冷静に対処している。

「そうやって彼女を連れ去ったのね」

「そうだよ、ミクは言わば物だ。物を拾って持ち去っても拾得物横領か占有離脱物横領くらいなもんだ」

「本当に馬鹿ね。自分で罪を認めるなんて」

「認めてねえだろうが」

「あら、連れ去ったんじゃない」

「確かに連れ去りはしたがあいつは物で……」

望のあまりにも自信満々の態度に日本橋さんが何かに気付いたようだった。

しかし、気付いた時には時既に遅しで。

ここで俺にも？マークが頭に浮かんだ。

ミクには戸籍なんて存在しない何故ならモニターから現れたのだから。

それに親や生まれた場所なんて、そこは日本橋さんと同じ認識だったが望の不敵な微笑みは何なんだ？

すると、望がミクに向って質問した。

「ミク。初音ミクはあなたの本名なの？」

「ち、違います」

「それじゃ、本名を言って御覧なさい」

望が初めて初音ミクと言う名前を口にした。そしてミクが答えた名前は……

「月島瑠菜るな です」

「つきしま？ るな？」

思わず声を上げてしまった。

俺と同じ様に日本橋さんも驚愕している。

「そ、そんな馬鹿な」

「彼女が自分から本名を名乗っているのに信じられないの？」

「信じられるか！ 戸籍なんてこいつにあるはずが無いんだ」

「あるわよ」

「へえ？」

望が日本橋さんの目の前に一枚の紙を差し出した。それを凝視すると日本橋さんの体から力が抜けて刑事に抱えられるようにして控え室から文字通り連行されてしまった。

俺自身も体から力が抜ける。

目の前には日本橋さんが見ていた一枚の書類があつた、手にするとそれはミクじゃなく瑠菜の戸籍謄本だった。

戸籍謄本には瑠菜の出身地と生年月日が書かれている。

『北海道札幌市 平成6年8月31日』

前の戸籍は、札幌市中央区大通西10丁目ダンロプSKビルつてあそこじゃないか……

ミクのソフトの発売元の、それに8月31日は発売日でって？

そして今の本籍は俺達が暮らしているマンションの住所が書かれていた。

用意周到とはこの事を言うのだろう望は完璧主義な所があるからな。それにしても戸籍まで用意出来るなんてどんな裏技を……

もしかして……

「月島って言う事は親父とお袋が養子縁組でもしたのか？」

「バーカ、良く見なさい。戸籍と言う物はね基本は夫婦及びその子どもについて編製されるものの。何処にパパとママの名前があるのよ」

望に上から目線で捲し立てられもう一度だけ戸籍謄本を手にするとあり得ない事が記載されていた。

『筆頭者 月島 朔？』

『婚姻日？』

「あのう、望ちゃん？ あり得ない事が起きてるんですける。いつ、結婚しちゃったの俺達？」

「朔は嫌なの？ 嫌なら離婚届出せばいいでしょ。私が絶対に全力で阻止するけど、それ以前に瑠菜が認めないわよね」

壊れかけて戸籍謄本が指から滑りぬけるように落ちていく、その戸

籍謄本は何を思ったか京橋さん達の足元に落ちた。

「うひょー すっ飛ばすね」

「男だな、朔」

「これが望ちゃんの手か流石だね」

湊さんと涼さんが歓声を上げて、京橋さんは顎に指を当てて戸籍を見ながら一頻り感心している。

恐らく望がミク（瑠菜）の事を彼女としか呼ばなかったのはこの所為なのだろう。

そして望がミクの名をミクに言った時に本名を言うようにミクに教え込んでいたのが推測だが想像できる。

取りあえず何も俺には先ずしなくてはいけない事がある。

立ち上がって真っ直ぐに瑠菜^{ミク}に向き合った。

「なあ、瑠菜？ 本当にこれで良いのか？」

「わ、私は望に言われて……これが一番言い方法だからって」

「それに、その言葉はまるで……」

そこまで言って言葉を飲み込んだ。

本契約が結ばれたと言う事なのだろう、そして契約をしたと言う事は……

後ろから涼さんと湊さんの咳払いが聞こえ、京橋さんは眉間に皺を寄せて溜息を付いている。

望はと言うと……眉毛がピクピクと痙攣している。

ここで愛想笑いの一つでもすれば恐ろしい惨劇が繰り広げられるのだろう。

「瑠菜^{ミク}、大好きだ。愛してる」

「うん……」

瑠菜の返事を聞く間もなく俺は瑠菜を抱きしめてその口を塞いだ。瑠菜が俺の首に腕を回し一筋の涙を零した。

しばらくこのままで居たかったがそうもいかない様だった。

「長いよ、朔ちゃん」

「朔、本当にお前は単純明快というか」

「単細胞だな、他に言う事は無いのか？」

「これで、私も肩の荷が下りたわね」

4人が好き勝手言っているがこれで良いんだと思う、瑠菜はステージ上で俺に対して意思表示はしてくれた訳だし。

一番災難だったのは日本橋さんだろう。

これで懲りてくれれば良いんだが、って立ち直す事は難しいかなミクのデビューイベントを完全にジャックされてしまって、まあツケが回って来たと言う事なのだろう。

それにしてもこの人達は笑っているけれどどれだけのポテンシャルを秘めているのだろう、それは行く行く判ってくる事なのだろう。

「さあ、お開きにしますか」

「そうだな、朔には貸しが出来たしな」

「あの、お手柔らかにお願いしますね」

「京、そっちはばっちりか？」

「良い出来だぞ」

「な、何がですか？」

「あのな、朔。俺達は一応プロとして活動しているんだ。それに今回は結構な経費が掛かっているんだぞ、回収はしないとな」

京橋さんが今日のライブの音源が録音されている原盤を持っている。

「も、もしかして……」

「マキシシングルを出させてもらうからな、売れるぞミクちゃんとLOOPのコラボだぞ」

「仕方が無いか、次は……」

3人の目がキラキラと悪戯っ子のように爛々としている。

ボーカルが歌えるようになったのだから活動再開と言う事なのだろう。

マキシシングルってLoop feat 初音ミクという感じののかな。

「これからは時々、ライブも組むからな。ミクじゃない瑠菜ちゃんにもお願いできるかな」

「うん！ 私、朔と歌うの大好き！ 朔、いっぱい歌を教えてね」

「よしや！ 楽しみが増えたぞ」

「瑠菜ちゃん用の曲も作らないとな」

望は何も言わずに微笑みながら見ただけだった。

主催者が不在になったライブハウスは撤収が始まっている。

「それじゃ、久しぶりにあれ行きますか？　せーの」

「撤収！」

美月&桂

ライブハウスの裏口から出ると軽トラでハル達がバイクを回収しに来ていた。

何も言わなくても判ってくれる仲間がそこにも居る。

ハルと拳を突き当ててばち家に帰ることになった。

京橋さん達は機材の撤収に追われている、本来なら一緒に片付けるべき事なのだが今日は特別という事で免除してくれた。

帰り道でも俺と瑠菜^{ミウ}を遠巻きに見る人は居ても取り囲む連中は皆無だった。

それは瑠菜も俺も笑顔だったからかもしれない。

何とか望と瑠菜を連れてマンションにたどり着いた。

そしてドアノブに手を伸ばすといきなりドアが開き腕を掴まれ……

「美月みつきスペシャル！」

「おやおや、久しぶりに会ったのに美月スペシャルは酷いよ。美月」

「桂けいさんは口出し無用よ。この馬鹿息子が、親を勝手に殺すな！」

望スペシャルがまるで子供騙しの様に思える。

富士急の『ええじゃないか』なんて真っ青なくらいに意識が吹き飛び、体が回転して床に叩きつけられた。

小さく息を吐き意識が遠のく、それをさせない様に胸倉を掴まれた。

「あら？ フタクじゃなくなってる。仕方が無いから許して上げる」

この聞き覚えのある上から目線で、望以上に俺にこんな仕打ちをするのは世の中に唯一無二の存在しかあり得ない……という事は……

意識が朦朧としてぼんやりとっしたまま目を開ける。

「お袋？」

「他に言う事が無いの？ 久しぶりに会ったのに」

「そのまま返すよ、久しぶりに会ったのにこの仕打ちは酷くない？」

「あら、完璧に落とされたいみたいね」

「死ぬわ！」

思わず突っ込んでしまった。

望に瓜二つの様なお袋・月島美月つきしまみつきとお袋に言わせる
と陽だまりの様な笑顔の長身の親父・月島 桂つきしま けいが立
っていた。

「ドイツにいるはずじゃ？」

「あのね、馬鹿息子のおかげで飛んで帰ってきたの。会った事も無
い女の子と朔を結婚させるなんて望が言うし、おまけに勝手に署名
までして役所に提出したって、事後承諾もいいところでしょ」

「あはは、アホか望！」

俺が声を上げるとお袋に思いつきり頭を小突かれた。

「誰の所為だと思ってるの？」

「すんません」

「まあ、良いわ。ヲタクを返上したみたいだし、これからは女の子
なんて引く手数多でしょ。良い子を見つけて離婚させれば良い事だ
し」

望みが可愛らしく思えるほど、さらつと恐ろしい事を言って退ける。
この母親にして望ありかそんな事を考えていると瑠菜が部屋に飛び
込んできた。

俺に抱き付いて俺の髪の毛をグチャグチャにしてパソコンデスクに
置いてあつた眼鏡を無理矢理掛けさせた。

「だ、駄目！ 朔は瑠菜だけのものだもん！ 朔はヲタクで良いん
だもん！」

「きゃん！ メチャクチャ可愛いじゃない！ こ、この子が瑠菜ち
やんなの？」

「もう、ママに写メ送ったでしょ」

「だって、あんなアニメみたいな女の子の写真を見せられて信じら
れると思うの？」

まあ、お袋の言う事には一理ある。

ミクの写メを見せられて実存するなんて普通は思えないだろう。

「朔は瑠菜と一緒にだよ……」

「ずーと一緒にだよ、俺は瑠菜が大好きだもん」

「朔、ありがとう」

泣きそうなのを我慢していた瑠菜が満面の笑顔になった。

「あの、お願いだからその可愛らしいお顔をママに見せてもらえない？」

「ママ？」

瑠菜がキョトンとした顔でお袋の顔を見上げる。

「か、可愛い！ 朔、こんな可愛い子を泣かせたら美月スペシャルじゃ済まないから覚悟しなさい」

「あの、話が見えないんですけど……」

「相変わらず頭の回転が鈍いのね。合格なんてもんじゃないわ、千金に値するわね」

頭の回転が鈍いのは少なからず陽だまりの様な緩々の親父の遺伝子を受け継いだからだと思うが、そんな事は口が裂けても言えなかった。

その後は大騒ぎだった。

「こんな娘が欲しかったの」やら「ママと呼んでね」

など大騒ぎしていたのはお袋一人だけなのだが、どれだけパワフルかそれは形容しがたい事だった。

そして、世間では別のことで大騒ぎになっていた。

何でも東京周辺、広い意味で関東の警察関係の電話回線がパンクして機能が殆ど麻痺していたらしい。

そしてインターネットを使っている官庁などのサーバーもアクセス数が急上昇してパンクし軒並みダウンしてサイバーテロかなんて真面目にアナウンサーが報じている。

四天王の言葉が頭を過ぎる

「ヲタクの底力を舐めるなですう」

まあ、ミクは海外にも知れ渡っているわけだし本当に敵に回すと怖いのはヲタクなのかも知れないと思った。

かくれんぼお月様と歌姫

ミクモとい瑠菜を弄り倒したお袋は満足げに親父を連れてドイツに戻り。

平穏な？ 日常が……

「朔、起きてよ。遅れちゃうよ」

「あと5分」

「駄目だよ、マネージャーが来ちゃうよ」

「あと気分……」

「瑠菜、退きなさい」

冷酷無情な言葉が聞こえ今は亡きアンディ・フグも逃げ出すような踵落しが、俺が飛び起きた枕元に炸裂する。

跳ね上がる鼓動を抑えながら顔を上げると心配そうな瑠菜と、グレーのスーツ姿の望が俺を睨みつけている。

「あの、おきますた。直ぐに準備します」

「本当に一度死んでみる？」

「だから、おきますた」

そう言いながらゴソゴソと着替えをはじめ洗面所で顔を洗い髪の毛を軽くセツトする。

男の身支度なんてこんな物だろう。

部屋に戻りいつもの様に瑠菜にキスをする。

「おはよう、瑠菜」

「お、おはよう、朔」

「本当に朝ばらからバカップルなんだから」

「別に朝だからじゃないよな、瑠菜。夫婦だもん」
「う、うん」

いつもと瑠菜の態度が違う事に直ぐに望が気付いた。

「なんだか変ね。何があったの？ 瑠菜」

「な、何でもないよ」

可愛らしいフワフワモコモコの白いニットワンピースの裾をギュツと握って、瑠菜が顔を真っ赤にして俯いてしまう。

瑠菜にそれを聞くのは酷だろう。

「ま、まさか……」

「あのな、望。俺と瑠菜は夫婦なんだ。今時、高校生カップルだって普通にしている事だぞ」

「だ、だからって朝からする話じゃないでしょ。それに瑠菜は……」

「普通の女の子だぞ、初めてのしるしもあったし」

「は、はじ……し、しる……」

純粹無垢な望には刺激が強すぎたか、血管が切れて血が噴出すんじゃないかと言っくらいに顔が真っ赤になって望が完全にフリーズしている。

すると迎えの車のクラクションが聞こえてきて瑠菜の手を取り駆け出した。

「望も早く京橋さんに何とかしてもらえよ」

「な、何を。ば、馬鹿朔！」

ミクを奪取する為に色々な人が力を貸してくれた。

そして望は大学と某企業が極秘裏に開発中の試作品を持ち出した事や、それ以外にも無茶をしすぎて処分の対象になってしまった。

大学側としては退学という事態だけは免れたかったのだろう、なんせ主席卒業は現実視されていたのだから。

止む無く休学扱いという事で謹慎処分になってしまった。

そんな大学に嫌気がさしたのか望は大学に謹慎が解けても休学のままあつさりとうちに行かなくなってしまった。

そして今はなんと京橋さんのトコの音楽プロモーションで働いている、それも京橋さん直属でその上に俺と瑠菜のマネージャー役までかって出たのだ。

怪我の功名と言えば良いのだろうか、兄妹としての監視役は終わったけど別の意味で恐ろしいほど監視される羽目になったてしまった

のだ。

何故、俺と瑠菜のマネージャーかって？

ミクを奪取した時のCDが発売されると信じられないくらいの枚数が売れて。

日本中に『Loop feat 初音ミク』は知れ渡り経費を回収できた上に、見たこともない金額が俺の通帳にも振り込まれてきた。京橋さんに確認すると瑠菜と2人分のギャラだと言われ更に『Fortune Love』は朔の作詞作曲だからなと言いつけられてしまった。

そして決してメジャーにはならず、時々自由気ままに皆の特に京橋さん・涼さん・湊さんのスケジュールが合う時にライブをしている。その為のマネジャーだった。

むかしむかし、ある所にかくれんぼしているお月様がいました

ある時、歌が大好きな歌姫がお月様の元に現れました

かくれんぼお月様は時々顔を覗かせて

歌が大好きな歌姫と一緒に楽しみながら

歌と一緒に歌って暮らしたとさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6026t/>

かくれんぼお月様と歌を知らない歌姫

2011年10月6日03時25分発行